



ヘルメスの翼に

—小樽商科大学FD活動報告書—

第14集

目 次

まえがき

部門長挨拶

第1章 商学部

「授業改善のためのアンケート」集計結果（報告） 令和3年度（2021年度）

第2章 大学院商学研究科（現代商学専攻）

「大学院FDアンケート」集計結果（報告） 令和3年度（2021年度）

第3章 大学院商学研究科（アントレプレナーシップ専攻）

「授業評価アンケート」集計結果と分析 令和3年度（2021年度）

第4章 令和3年度CGS教育支援部門の活動状況

令和3年度CGS教育支援部門スタッフ一覧

小樽商科大学グローバル戦略推進センター教育支援部門
(2021年度)

まえがき

本報告書「ヘルメスの翼に—小樽商科大学FD活動報告書—第14集」は、令和3年度におけるグローバル戦略推進センター教育支援部門のFD活動をまとめたものです。

本学におけるFD活動は、平成12年度より教育課程改善委員会のもとに設置されたFD専門部会を実施主体として活動を続けてきました。その後、本学におけるFD活動を組織的に展開するために、教育課程改善委員会を発展的に解消しその機能を継承する教育開発センターが平成16年4月に設置されました。

平成19年度に教育開発センターの組織が改編され、FD活動は、学部におけるFD活動を「学部教育開発部門」が、大学院現代商学専攻におけるFD活動を「大学院教育開発部門」が、また、ビジネススクール（専門職大学院）である大学院アントレプレナーシップ専攻におけるFD活動は「専門職大学院教育開発部門」が実施主体となり展開されています。

FD活動を通じてより質の高い教育を実現するために、本学教職員、学生、関係者の忌憚のないご意見を教育支援部門にいただければ幸いです。

本報告書の表題「ヘルメスの翼に」は、本学の学章（シンボルマーク）「ヘルメスの翼に一星」から取ったものです。本学ホームページによると、学章について次のように説明されています。

この学章「ヘルメスの翼に一星」は、商業神ヘルメスの翼の上にある一星が、北の大地から英知の光を放つ様子をあらわしたものです。下のリボンには、1910年の創立とOtaru University of Commerceの頭文字が示されています。

ヘルメス(Hermes)は、ギリシャ神話の神の一人で伝令の神、また商業、学術などの神とされています。ローマではマーキュリー(Mercury)と呼ばれています。ヘルメスは2匹の蛇がからみついた翼の杖をもち、伝令の神として世界を飛翔しています。一星は、本学の前身である小樽高等商業学校以来、本学のシンボルとして用いられてきました。「北に一星あり。小なれどその輝光強し。」と謳われた本学の伝統を象徴しています。

FD活動を通じてより質の高い教育が実現でき、それによってヘルメスの翼に輝く一星がより強く光り輝くことを願って、本報告書の表題を「ヘルメスの翼に」としました。

本報告書は「学部教育開発専門部会」、「大学院教育開発専門部会」及び「専門職大学院教育開発専門部会」が中心となって作成したものです。どうぞご覧ください。

令和4年5月

新型コロナウイルスによる世界的パンデミックは、2021年になっても一向に収束の兆しを見せない中、今年度(2021年度)の前期は前年度とほぼ変わらず遠隔授業が大半を占め、後期には一部の科目で対面授業を拡大したものの、7～8割の授業は遠隔で行わざるを得ない状況でした。しかし、2020年度の1年間の経験から、オンラインで配信する授業形態にほとんどの教員は習熟し、学生の側もオンラインで受講することのメリットを一部で感じているように見受けられます。その一方で、遠隔授業に関わる課題も少なからず見つかり、これらを分析し整理した上で、質の高い遠隔授業の実現に向けた改善にとりくむべき時期に来ているというのが現状であります。

今回上梓しました本学のFD活動報告書「ヘルメスの翼に」は、2000年度から2003年度までのFD活動をまとめた第1集から数えて第14集となります。この第14集は、今年度の授業の大半がオンラインの形態で実施されたため、第13集(2020年度)に引き続いて、学生による遠隔授業の評価の分析が中心となっております。遠隔授業は教育の質を保証できたのか、遠隔授業の限界はどこにあるのか、さらには、対面授業にはない遠隔授業のメリットは何か、といった視点からこの報告書を見るならば、本学のFD活動を新たな領域に広げる契機となるものであると前向きに捉えることもできます。

今回、分析結果が詳細に報告されている学部の「授業改善のためのアンケート」は、例年通り、研究指導などを除くほぼ全ての学部の科目を対象としておりますが、アンケート項目に関しては遠隔授業の実施に合わせて2020年度から変更されております。したがって、それ以前の年度と単純に比較はできませんが、各項目に対する回答の平均値から、学生の理解度や満足度などは概ね例年通りであったことが見て取れます。多くの教員の1年間の経験と事務スタッフの努力により、今年度も最低限の教育の質を維持することができたと安堵している次第です。

他方で、2020年度以降の種々のアンケート結果の分析から、遠隔授業に関わるいくつかの改善すべき課題も浮かび上がっています。コロナが完全に収束するまでは少なからず遠隔授業が必要であることは、言うまでもありません。加えて、コロナ収束後にも遠隔授業がそのメリットを生かした形で活用される可能性も十分に考えられます。今後も教学IR室と連携しつつ、学内のさまざまなデータを活用して、遠隔配信を含めた効果的な授業方法を検討・開発することによって、より多くの学生に幅広い学びの機会を提供し、大学全体のさらなる教育改善につなげていくことが求められるでしょう。これを教育支援部門に課せられた責務として意識しつつ、日々の活動に力を尽くして参ります。

目 次

まえがき

部門長挨拶 教育支援部門長 佐野博之

第1章 商学部におけるFD活動

令和3年度 「授業改善のためのアンケート」集計結果 4

1. 調査の概要
 - 1.1 調査の目的
 - 1.2 調査の方法
2. 授業改善のためのアンケート調査結果
 - 2.1 実施状況
 - 2.2 回収状況
 - 2.3 評定値
 - 2.4 自由記述
3. まとめ

第2章 大学院商学研究科現代商学専攻におけるFD活動

令和3年度 大学院FDアンケート集計結果 18

1. 大学院生対象(調査の概要、実施方法、回答状況、集計結果)
2. 教員対象(調査の概要、対象者、実施時期、実施方法、回答状況、集計結果)

第3章 大学院商学研究科アントレプレナーシップ専攻におけるFD活動

令和3年度 「授業評価アンケート」集計結果と分析 31

1. はじめに
2. アンケートの概要(質問項目, 集計結果)
3. アンケートの分析(「教員の教授法について」)
4. まとめ(分析結果のまとめ, 今回の研修で確認・議論しておきたい点)

授業評価アンケート結果を踏まえた自己評価
(令和2年度後期科目、令和3年度前期科目)

第4章 令和3年度CGS教育支援部門の活動状況

- ・ 令和3年度CGS教育支援部門の活動内容
- ・ 令和3年度CGS教育支援部門スタッフ一覧

第1章 商学部

「授業改善のためのアンケート」集計結果

2021 年度「授業改善のためのアンケート」集計結果（報告）

1. 調査の概要

1.1 調査の目的

本学の授業の改善活動の一環として、履修者による授業改善アンケートを実施する。アンケート調査は、グローバル戦略推進センター教育支援部門学部教育開発専門部会で実施する。アンケート調査の実施後は、学部教育開発専門部会で集計・分析し、本学の FD 活動報告書「ヘルメスの翼に」およびグローバル戦略推進センター教育支援部門の web サイト上で公表する。ただし、集計したデータは授業科目が特定されるような公表は行わず、授業改善以外の目的には使用しない。

1.2 調査の方法

「令和 3 年度前期『授業改善のためのアンケート』実施要領」（図 1）および「令和 3 年度後期『授業改善のためのアンケート』実施要領」（図 2）にしたがい、表 1 の項目について調査を実施する。Q1 から Q9 は単項選択による回答形式とし、「1. 全くそう思わない」「2. そう思わない」「3. どちらともいえない」「4. そう思う」「5. とてもそう思う」の 5 件法で調査する。回答結果は、1～5 点に得点化した後、集計を行う。Q10 から Q12 は自由記述による回答形式とする。

令和3年度前期「授業改善のためのアンケート」実施要領

1. 実施科目

以下の科目を除いた「令和3年度前期開講科目」とする。

なお、非常勤講師担当の科目は、担当教員へ協力依頼を行い、その同意のうえ実施するものとする。

※以下の科目は、実施しないものとする。

- (1) 研究指導、卒業論文（夜間主）
- (2) 健康スポーツⅡc（スキー）
- (3) 教育実習に係る科目
- (4) 日本語科目
- (5) 社会連携実践Ⅰ～Ⅲ
- (6) アジア・オセアニア事情、ヨーロッパ事情、アメリカ事情
- (7) 履修者が10名以下の科目（希望があれば教員の依頼に基づき実施する。）

2. 実施期間 ●前期科目 令和3年7月26日(月)～8月13日(金)

●夏季集中講義 令和3年8月17日(火)～9月18日(土)

3. 実施方法 学習支援システム manaba を使用すること。

【注意事項】

※ 学生は 1科目につき1回（クラスのある科目については、1クラスにつき1回）、回答を行います。

※ 1科目を複数の教員で担当されている場合、manaba では「実施科目・担当教員一覧」のとおり担当教員を登録しております。

4. 集計・分析・結果の公表

①アンケートの集計は、学部教育開発専門部会で行う。

②集計結果は、学部教育開発部門で分析し報告書等で公表する。ただし、授業科目が特定されるような公表は行わない。

③集計したデータは、授業の改善以外の目的には使用しない。

④結果個票は、前期科目については9月上旬に、集中講義については令和3年2月頃に紙媒体で担当教員へ配付する。

5. 事務担当

教務課教務企画係

TEL : 0134-27-5236

E-Mail : k-kikaku@office.otaru-uc.ac.jp

図1 令和3年度前期「授業改善のためのアンケート」実施要領

令和3年度後期「授業改善のためのアンケート」実施要領

1. 実施科目

以下の科目を除いた「令和3年度後期開講科目」とする。

なお、非常勤講師担当の科目は、担当教員へ協力依頼を行い、その同意のうえ実施するものとする。

※以下の科目は、実施しないものとする。

- (1) 研究指導、卒業論文（夜間主）
- (2) 健康スポーツⅡc（スキー）
- (3) 教育実習に係る科目
- (4) 日本語科目
- (5) 社会連携実践Ⅰ～Ⅲ
- (6) アジア・オセアニア事情、ヨーロッパ事情、アメリカ事情
- (7) 履修者が10名以下の科目（基礎ゼミナールを除く）

※希望があれば教員の依頼に基づき実施する。

2. 実施期間：令和4年1月17日（月）～2月11日（金）

3. 実施方法 学習支援システム manaba を使用すること。

【注意事項】

※ 学生は 1科目につき1回（クラスのある科目については、1クラスにつき1回）、回答を行います。

※ 1科目を複数の教員で担当されている場合、manabaでは「実施科目・担当教員一覧」のとおり担当教員を登録しております。

4. 集計・分析・結果の公表

- ①アンケートの集計は、学部教育開発専門部会で行う。
- ②集計結果は、学部教育開発専門部会で分析し報告書等で公表する。ただし、授業科目が特定されるような公表は行わない。
- ③集計したデータは、授業改善のための手がかりを得るためにのみ使用する。
- ④結果個票は、令和4年3月上旬頃に担当教員へ配付する。

5. 事務担当

教務課教務企画係

TEL : 0134-27-5236

E-Mail : k-kikaku@office.otaru-uc.ac.jp

図2 令和3年度後期「授業改善のためのアンケート」実施要領

表 1 授業改善のためのアンケート 質問項目

Q1	授業の企画意図や到達目標は明確に伝わったと思いますか。
Q2	この科目を深く理解できたと思いますか。
Q3	この科目への興味が高まったと思いますか。
Q4	この科目の内容を自分から予習したり復習したりしてみようと思いましたか。
Q5	この科目に関係のある分野への興味は高まったと思いますか。
Q6	教員や他の学生とのやりとりは、簡単でスムーズに行われていると思いましたか。
Q7	教員や他の学生とのやりとりは、活発で頻繁に行われていると思いましたか。
Q8	講義資料の配付やレポートの提出が、支障なく行えましたか。
Q9	web掲示板（manaba）やメール、SNS等により、授業に関する質問がしやすいと思いましたか。
Q10	この授業のなかで、映像や音声、資料配付、レポート提出など、システム等のトラブルがあれば、具体的にお書きください。
Q11	授業の中で、難しく感じた内容があれば、具体的にお書きください。
Q12	授業の中で、より深く掘り下げてほしい内容があれば、具体的にお書きください。

2. 授業改善のためのアンケート調査結果

2.1 実施状況

本学では、授業改善のためのアンケート調査結果は科目ごとに集計されており、その結果は、授業を担当した各教員へフィードバックされている。ここでは、授業改善のためのアンケート調査結果に関して、本学全体の概要と動向を報告する。

令和3年度における対象科目数は479科目（前期275科目，後期204科目）であり，すべての対象科目において調査が実施された（表2）。

表2 授業改善アンケートの対象科目数

	前期	後期	通年	全体
対象科目数	275	204		479
非対象科目数	30	36	139	205

2.2 回収状況

調査が実施された科目について、開講期別の履修者数、回答者数、回収率を表3に示す。

全履修者数は33,147名（前年度33,767名），うち回答者数は9,964名（前年度14,885名），全体の回収率は30.1%であった。開講期別の回収率は，前期31.3%（前年度46.5%），後期28.2%（前年度40.6%）となっている。前年度に比べて，前期の回収率は15.2ポイント低下，後期は12.4ポイント低下，全体では14ポイント低下している。

表3 授業改善アンケートの開講期別履修者数・回答者数・回収率

開講期	履修者数	回答者数	回収率
前期	19,834	6,204	31.3%
後期	13,313	3,760	28.2%
年間計	33,147	9,964	30.1%

2.3 評定値

授業改善アンケートの各質問項目に対する評定値（平均値，標準偏差）を表4へ示す。全体的に，前期より後期の方がやや平均値は低い傾向にある。全体の平均値は，いずれも3.6から4程度であり，アンケートに回答した学生は概ね問題なく履修しているといえる。

表 4 授業改善アンケートの各質問項目に対する平均値および標準偏差

質問項目	前期		後期		全体	
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD
Q1 授業意図・到達目標	4.21	0.81	4.15	0.82	4.19	0.81
Q2 科目の理解	4.01	0.88	3.90	0.88	3.97	0.88
Q3 科目への興味	4.02	0.97	3.96	0.96	4.00	0.97
Q4 予習・復習	3.76	1.04	3.73	1.03	3.75	1.03
Q5 関連分野への興味	3.95	0.97	3.89	0.96	3.93	0.97
Q6 やりとりのスムーズさ	3.87	1.02	3.81	1.00	3.84	1.01
Q7 やりとりの活発さ	3.70	1.13	3.59	1.12	3.65	1.13
Q8 資料配付・レポート提出	4.35	0.81	4.26	0.84	4.32	0.82
Q9 質問のしやすさ	3.92	0.99	3.83	0.98	3.89	0.99

2.4 自由記述

アンケートに回答した 9,964 名のうち、Q10「システムのトラブル」は 1,216 件 (12.2%)、Q11「難しい内容」は 1,364 件 (13.7%)、Q12「掘り下げてほしい内容」は 1,000 件 (10.0%) の自由記述を得た。自由記述のうち「特になし」「問題なし」などの回答を除くと、それぞれ Q10 は 571 件 (5.7%)、Q11 は 986 件 (9.9%)、Q12 は 501 件 (5.0%) であった。

自由記述について、KH Coder¹による共起ネットワーク分析を行った。Q10「システムのトラブル」について、出現単語の頻度（上位 150 個）を表 5、共起ネットワークを図 3 へ示す。Q11「難しい内容」について、出現単語の頻度（上位 150 個）を表 6、共起ネットワークを図 4 へ示す。Q12「掘り下げてほしい内容」について出現単語の頻度（上位 150 個）を表 7、共起ネットワークを図 5 へ示す。

Q10「システムのトラブル」における出現頻度の最も高い単語は「授業」であった。

授業に関する用語として「提出／時間／トラブル／テスト／レポート」があり、授業中に接続ができずテストやレポートが提出できない、時間までに提出が間に合わない、といった記載があった。また、「Zoom」では、「落ちる／共有／画面」といった、リアルタイム配信時におけるトラブルについて記載があった。その他、「音声／動画／講義／資料」といった音声、映像のトラブルについて言及が見られた。

Q11「難しい内容」における出現頻度の最も高い単語は「難しい」であった。難しいに関連する単語として「授業／感じる／内容／理解」といったものがあった。また、「量／多い／大変」、「テスト／問題／時間」、「レポート／課題／書く／提出」といった課題の量に関する

¹ 樋口耕一（2020）社会調査のための計量テキスト分析 ―内容分析の継承と発展を目指して― 第 2 版．ナカニシヤ出版

る意見が多くあった。また、「英語／ディスカッション」、「覚える／単語／文法」といった語学に関する意見が見られた。

Q12「掘り下げてほしい内容」における出現頻度の最も高い単語は「思う」であり、関連する用語として「授業／内容」があった。「講義／掘り下げる／深い／面白い」、「説明／詳しい」、「触れる／多い」、「理解／動画／時間」といった、より詳しい内容や、動画をもう少し聴講したいといった学習意欲に関する記載もあった。「英語／学習／日常／会話」、「知る／文化」といった具体的な内容を示す記載も見られた。

3. まとめ

令和 3 年度「授業改善のためのアンケート」結果では、次のようなことが明らかとなった。

- ・授業改善アンケートは、全ての対象科目について実施され、全体の回答者は 9,964 名であった。回収率は、前年度の 44.1%から 14 ポイント低下し、30.1%であった。前期、後期とも前年度に比べて回収率は大幅に低下している。
- ・授業改善アンケートの各質問項目に対する平均値は 3.6 から 4 程度であり、回答した学生は概ね問題なく履修しているといえる。
- ・自由記述については、アンケートに回答した 9,964 名のうち、「システムのトラブル」に関しては 571 件 (5.7%)、「難しい内容」に関しては 986 件 (9.9%)、「掘り下げてほしい内容」に関しては 501 件 (5.0%) の記述があった。

表5 Q10「システムのトラブル」の出現単語（上位150個）

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
授業	206	ミス	18	オンライン	12
ZOOM	121	確認	18	システム	12
思う	105	説明	18	スムーズ	12
提出	98	良い	18	マナバ	12
音声	97	スライド	17	回線	12
テスト	77	環境	17	教員	12
資料	77	気	17	見える	12
動画	77	時々	17	止まる	12
講義	73	人	17	小さい	12
時間	71	接続	17	対面	12
先生	70	途切れる	17	大変	12
トラブル	65	途中	17	ロード	11
感じる	58	聞き取る	17	回	11
画面	56	理解	17	期限	11
レポート	50	アップ	16	教室	11
共有	47	回答	16	担当	11
多い	45	使用	16	短い	11
見る	39	支障	16	丁寧	11
問題	39	難しい	16	復習	11
落ちる	39	不具合	16	Teams	10
少し	34	デマンド	15	ファイル	10
映像	33	大学	15	レスポンス	10
課題	33	読む	15	遠隔	10
内容	33	入る	15	開始	10
悪い	31	配信	15	学習	10
公開	31	聞こえる	15	許可	10
分かる	31	オン	14	見れる	10
毎回	31	メール	14	困る	10
Manaba	27	リアルタイム	14	参加	10
行う	27	レジュメ	14	始まる	10
書く	26	期末	14	声	10
改善	25	形式	14	切れる	10
学生	24	視聴	14	多々	10
言う	24	受講	14	非常	10
質問	24	出席	14	必要	10
連絡	24	設定	14	返信	10
聞く	23	前	14	方法	10
最後	22	通信	14	無い	10
試験	22	違う	13	カメラ	9
配布	22	解説	13	ポイント	9
パソコン	21	期間	13	解答	9
使う	21	事前	13	最初	9
アプリ	20	重い	13	出す	9
受ける	20	出る	13	情報	9
生徒	20	出来る	13	成績	9
自分	19	他	13	低い	9
対応	19	板書	13	REMO	8
遅い	19	部分	13	お願い	8
特に	19	文字	13	オン	8
もう少し	18	変更	13	ネット	8

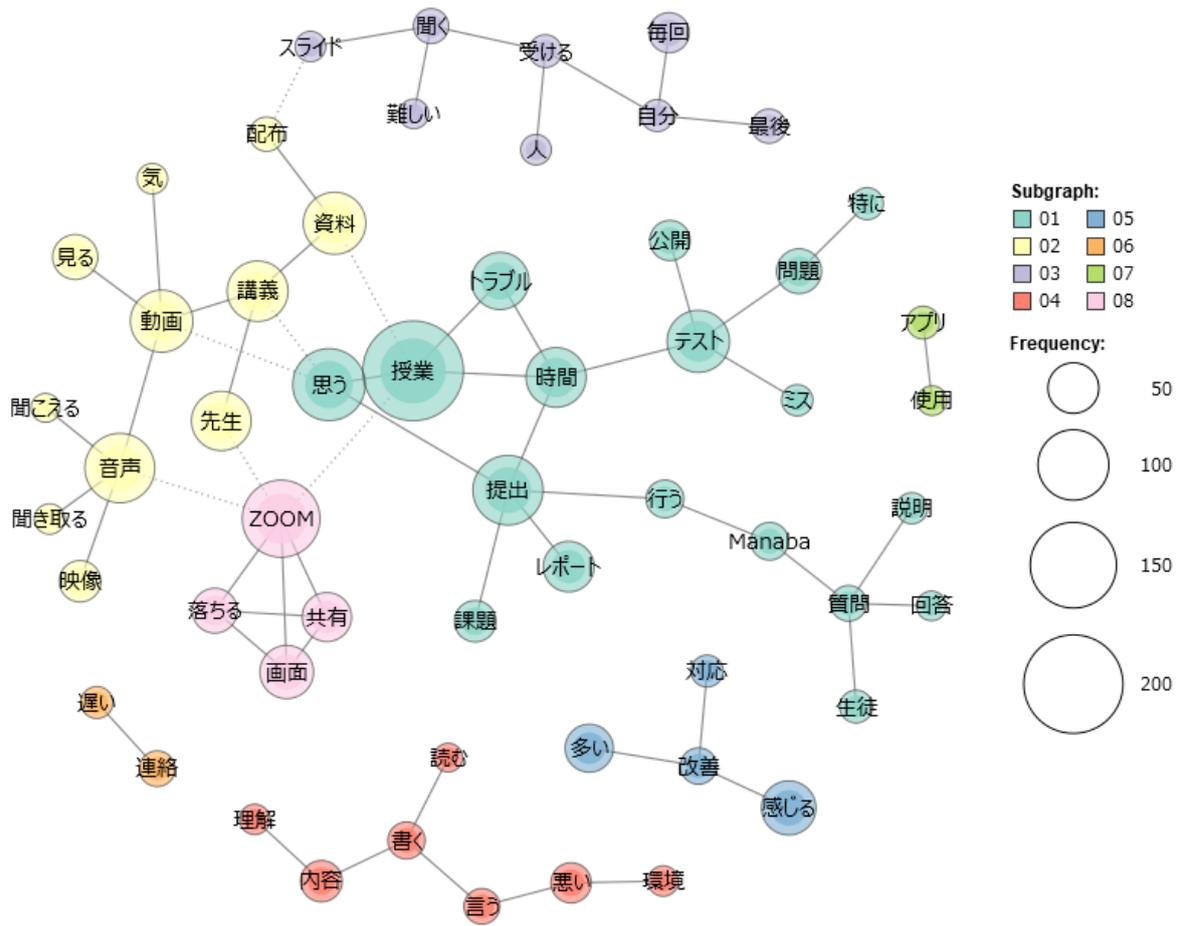


図3 Q10「システムのトラブル」の共起ネットワーク

表 6 Q11 「難しい内容」の出現単語（上位 150 個）

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
難しい	541	勉強	25	作る	14
感じる	260	試験	24	中間	14
授業	219	資料	24	答え	14
理解	187	出る	24	複雑	14
内容	184	他	24	解答	13
思う	142	読む	24	最後	13
レポート	122	発音	24	初めて	13
テスト	115	聞く	24	少ない	13
多い	102	行う	23	身	13
先生	93	文章	23	専門	13
時間	91	考える	22	前	13
自分	91	丁寧	22	大学	13
問題	91	分析	22	短い	13
英語	78	もう少し	21	伝える	13
課題	77	自体	21	評価	13
説明	73	質問	21	文	13
講義	59	数式	21	理論	13
解説	56	すべて	20	manaba	12
少し	56	言葉	20	異なる	12
書く	55	進む	20	確認	12
大変	55	量	20	楽しい	12
全体	54	話	20	教える	12
人	52	必要	19	個人	12
分かる	52	分野	19	最終	12
部分	45	予習	19	受ける	12
覚える	42	話す	19	数学	12
特に	39	聞き取る	18	知る	12
使う	35	リスニング	17	提示	12
提出	33	学生	17	変化	12
期末	32	具体	17	来る	12
単語	32	経済	17	練習	12
意味	31	成績	17	スムーズ	11
教科書	30	全く	17	スライド	11
言う	30	知識	17	テーマ	11
非常	30	日本語	17	扱う	11
文法	30	グループ	16	音声	11
見る	29	回	16	箇所	11
毎回	29	後半	16	厳しい	11
高い	28	最初	16	仕組み	11
動画	28	終わる	16	字	11
良い	28	基本	15	調べる	11
レベル	27	形	15	不安	11
学ぶ	27	統計	15	要約	11
生徒	27	無い	15	ZOOM	10
学習	26	履修	15	コミュニケーション	10
計算	26	例	15	スペイン	10
ディスカッション	25	グラフ	14	違う	10
回答	25	意見	14	区別	10
難易	25	科目	14	苦手	10
復習	25	簡単	14	今	10

表7 Q12「掘り下げてほしい内容」の出現単語（上位150個）

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
思う	159	興味深い	13	終わる	7
授業	106	行う	13	身近	7
内容	71	触れる	13	読む	7
掘り下げる	68	欲しい	13	日本	7
感じる	55	解答	12	判例	7
深い	55	受ける	12	文	7
知る	55	機会	11	毎回	7
講義	50	具体	11	I	6
先生	44	実際	11	お話	6
学ぶ	43	出来る	11	ドイツ	6
ありがとう	36	難しい	11	扱う	6
もう少し	36	日常	11	意見	6
特に	36	文法	11	違い	6
面白い	36	テーマ	10	課題	6
説明	30	テスト	10	感じ	6
楽しい	28	基礎	10	関連	6
経済	28	経営	10	韓国	6
英語	26	考える	10	後期	6
十分	25	増やす	10	国際	6
人	25	理論	10	最後	6
詳しい	24	練習	10	仕方	6
問題	24	話す	10	使える	6
部分	23	オンライン	9	事例	6
理解	23	嬉しい	9	出る	6
時間	22	個人	9	小樽	6
他	22	今後	9	場合	6
解説	21	取り上げる	9	進む	6
聞く	21	書く	9	生活	6
良い	21	紹介	9	対面	6
教える	20	戦略	9	単語	6
分野	19	提示	9	知識	6
勉強	19	方法	9	中国	6
会話	18	例	9	添削	6
見る	18	マーケティング	8	入る	6
自分	18	映画	8	文章	6
使う	16	開発	8	履修	6
質問	16	関わる	8	お願い	5
多い	16	少し	8	たくさん	5
表現	16	発音	8	イメージ	5
文化	16	復習	8	ケース	5
学習	15	分かる	8	ゲーム	5
生徒	15	分析	8	ブレイクアウトル	5
話	15	それぞれ	7	ポイント	5
学生	14	意味	7	レスポンス	5
教科書	14	演習	7	レベル	5
興味	14	回答	7	違う	5
動画	14	計算	7	過去	5
グループ	13	資料	7	学べる	5
ディスカッション	13	持つ	7	簡単	5
レポート	13	社会	7	疑問	5

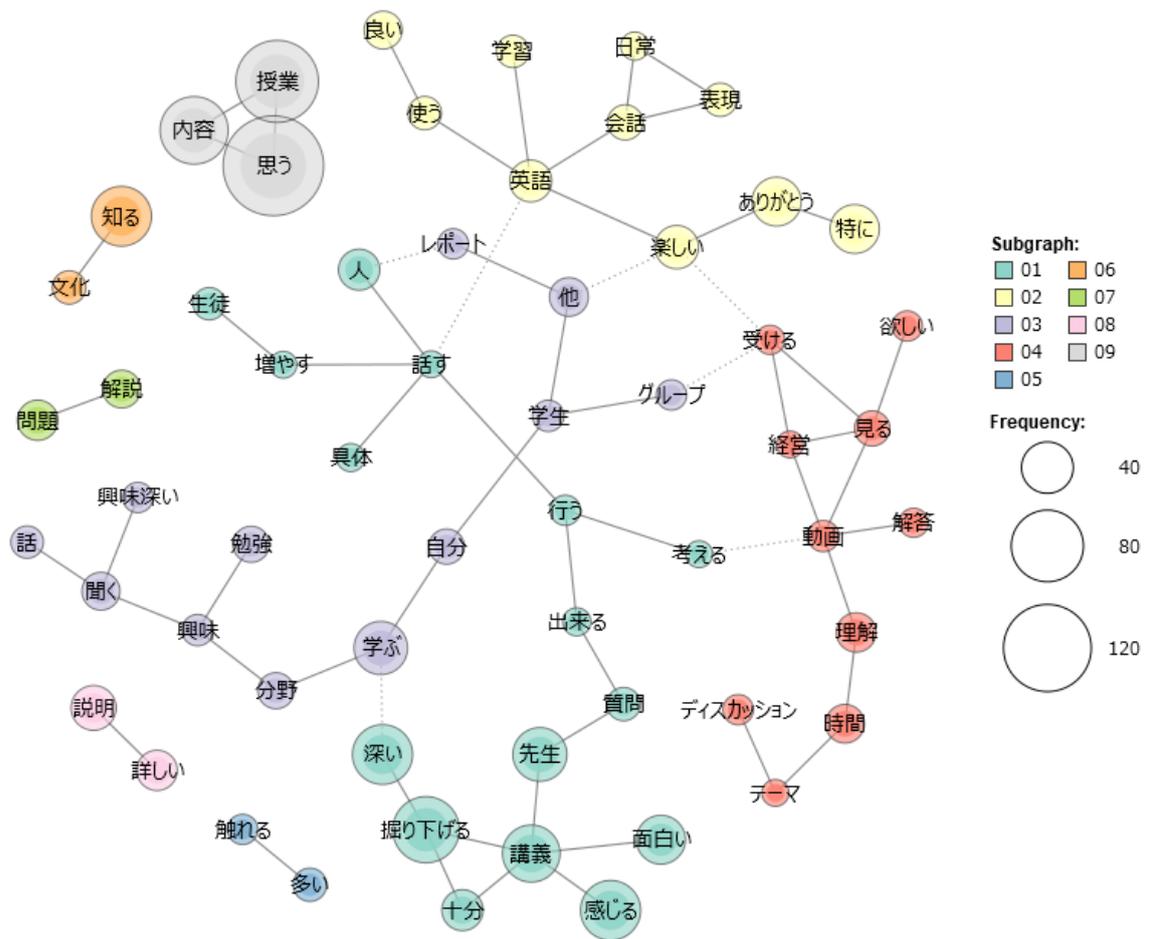


図5 Q12「掘り下げてほしい内容」の共起ネットワーク図

第2章 大学院商学研究科(現代商学専攻)

令和3年度 大学院FDアンケート集計結果

令和3年度大学院FDアンケート（学生対象） 集計結果報告

1. 令和3年度 大学院生対象調査の概要

大学院現代商学専攻博士前期・後期課程の教育課程（カリキュラム）及び教育支援体制に関して幅広く学生から意見等を聴取し、今後の大学院指導に資することを目的として実施する。

2. 対象者

現代商学専攻博士前期・後期課程に在籍する学生

3. 実施時期

令和3年10月18日（月）～11月19日（金）

4. 実施方法

対象者に、WEBアンケートシステムからメールで依頼し、回答してもらう。

5. 集計結果

アンケートの集計・分析は、大学院教育開発専門部会で行い公表する。本アンケート調査は、数量調査（5件法）と自由記述から構成されている。数量調査に関しては、数値が大きいほど高評価を示している。

6. 回答状況

対象者数は27名のうち25名から回答が得られ、回収率は92.6%であった。

7. 集計結果

7.1. あなた自身にとって興味深い科目が開講されている

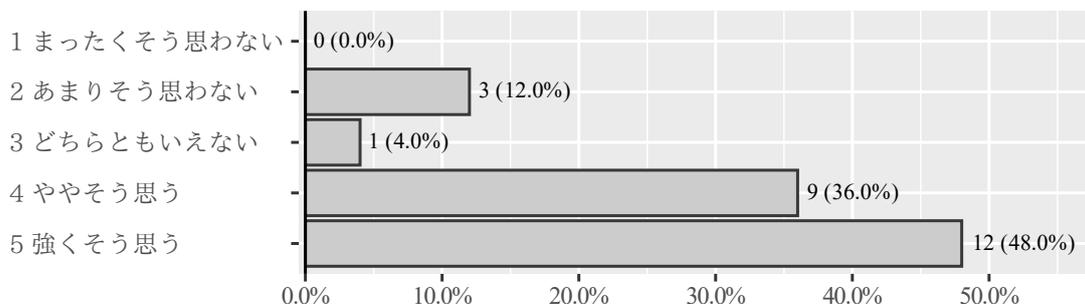


図7-1: 「あなた自身にとって興味深い科目が開講されている」の回答

7.2. 幅広い内容にわたって科目を選択することができる

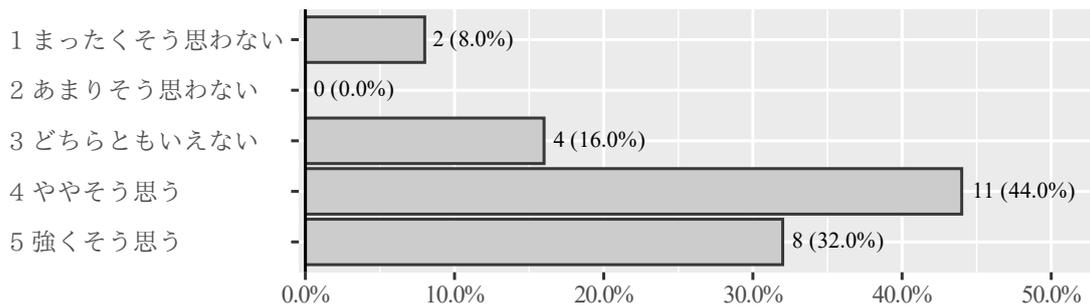


図7-2: 「幅広い内容にわたって科目を選択することができる」の回答

7.3. 履修科目を決定する際シラバスが参考になった

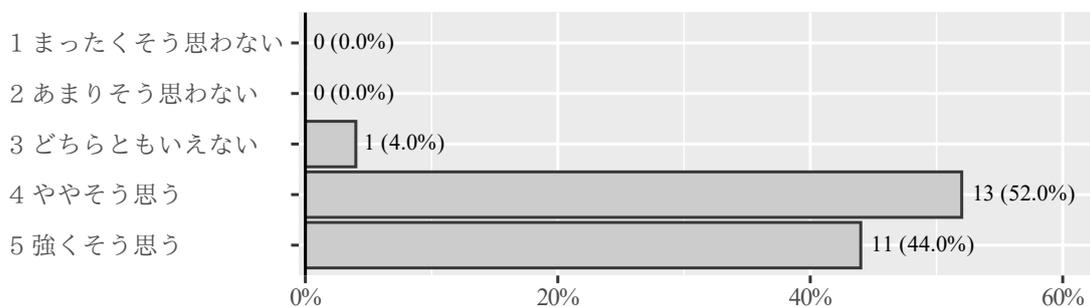


図7-3: 「履修科目を決定する際シラバスが参考になった」の回答

7.4. 大学院に期待していたとおりの知識や技能を獲得できた

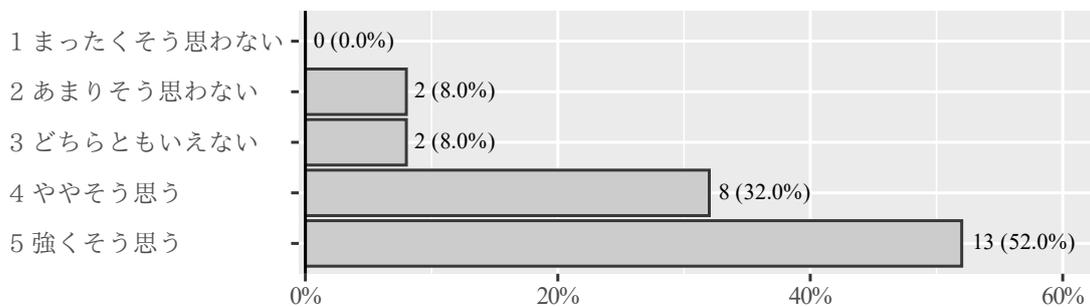


図7-4: 「大学院に期待していたとおりの知識や技能を獲得できた」の回答

7.5. 修了に必要な「講義科目」の単位数は適切である

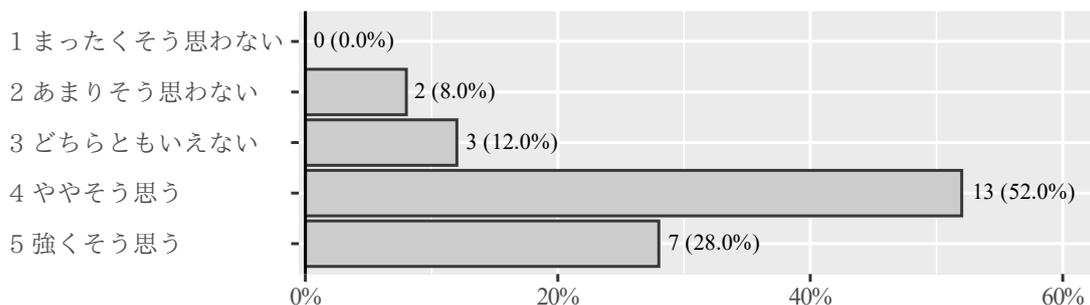


図7-5: 「修了に必要な「講義科目」の単位数は適切である」の回答

7.6. 各項目の平均値

「強くそう思う」から「まったくそう思わない」までの5段階の選択肢に対して5点から1点を与え、その平均値を集計示す。

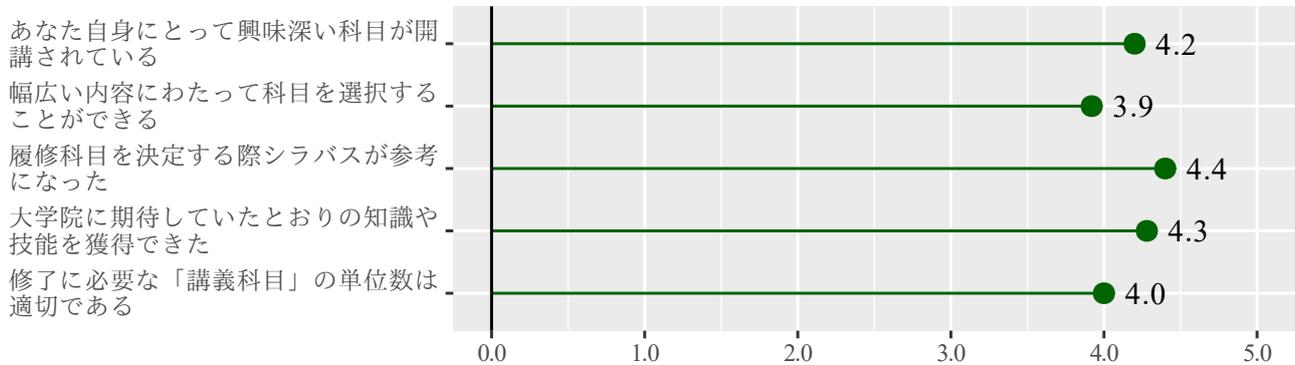


図7-6: 各設問の平均値

7.7. 指導教員から十分な指導（研究指導・論文指導など）を受けている

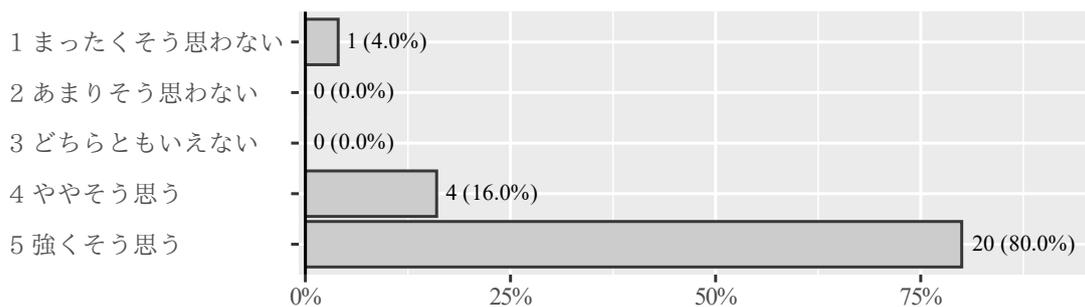


図7-7: 「指導教員から十分な指導（研究指導・論文指導など）を受けている」の回答

7.8. 研究に必要な図書資料（書籍・論文）が十分に整備されている

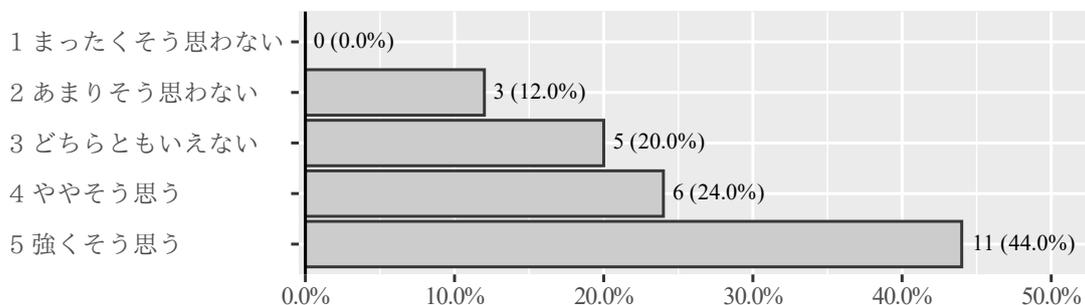


図7-8: 「研究に必要な図書資料（書籍・論文）が十分に整備されている」の回答

7.9. 研究に必要な電子ジャーナル・データベースが十分に整備されている

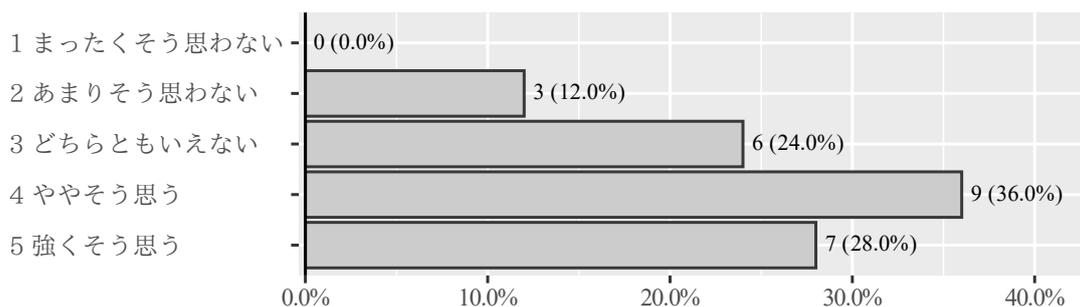


図7-9: 「研究に必要な電子ジャーナル・データベースが十分に整備されている」の回答

7.10. 大学院生の共同研究室は研究活動に適した環境である

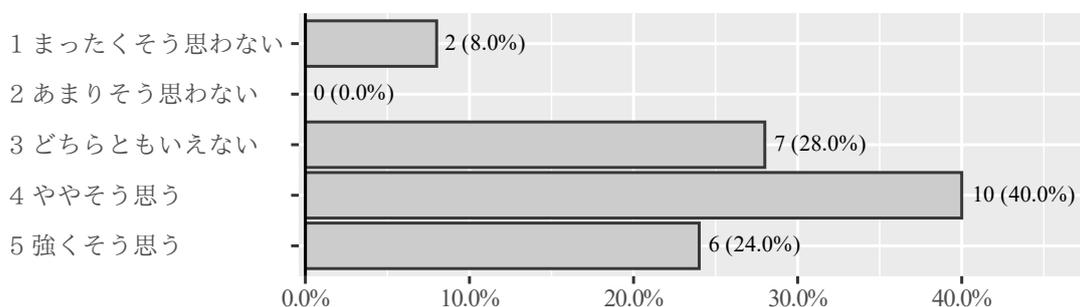


図7-10: 「大学院生の共同研究室は研究活動に適した環境である」の回答

7.11. 学内設備（PC など）の利用環境が整っている

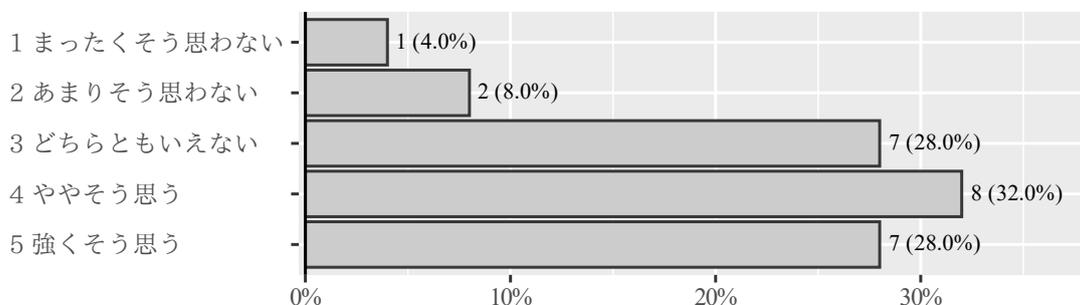


図7-11: 「学内設備（PC など）の利用環境が整っている」の回答

7.12. 各項目の平均値

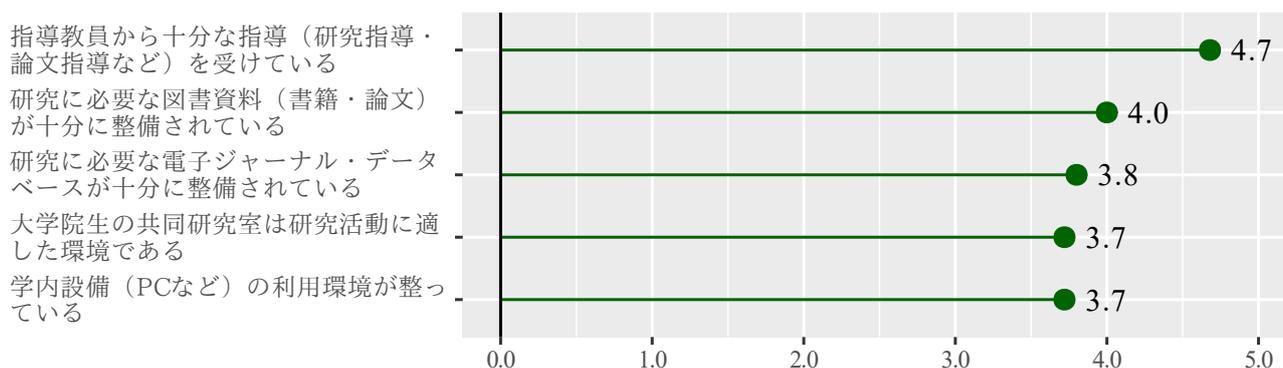


図7-12: 各設問の平均値

7.13. 進路や経済支援など学生生活全般について相談できる環境がある

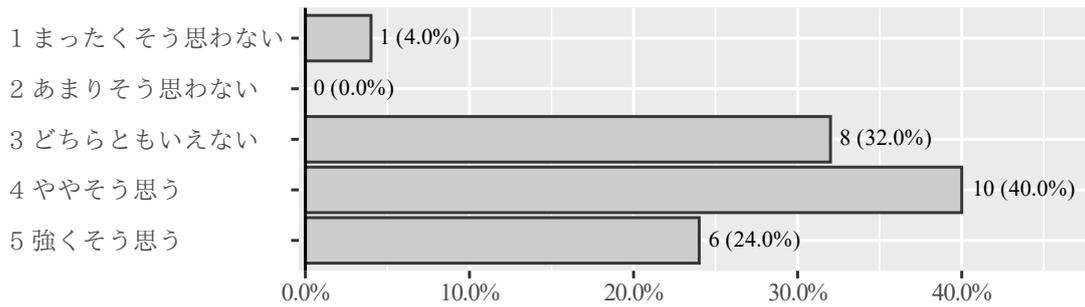


図7-13: 「進路（就職活動を含む）や経済支援など学生生活全般について相談できる環境がある」の回答

7.14. 現在の大学院における学習活動に満足している

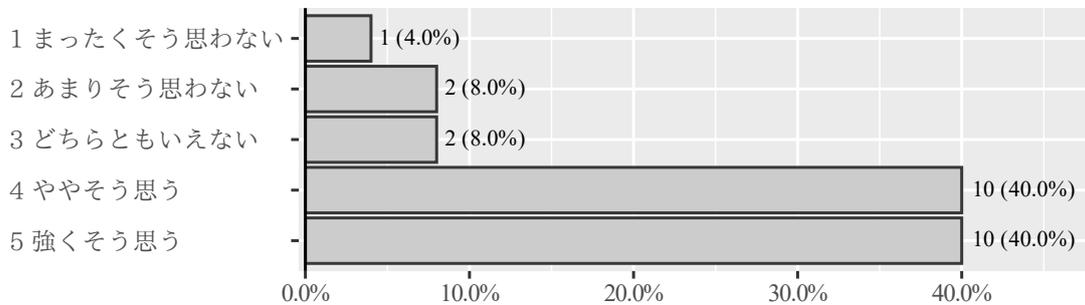


図7-14: 「現在の大学院における学習活動に満足している」の回答

7.15. 各項目の平均値

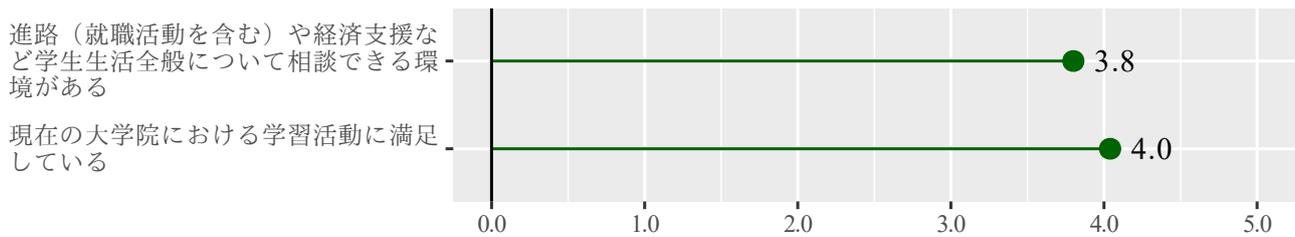


図7-15: 各設問の平均値

7.16. 学内の講義や研究指導以外に研究会や勉強会に参加したことがある

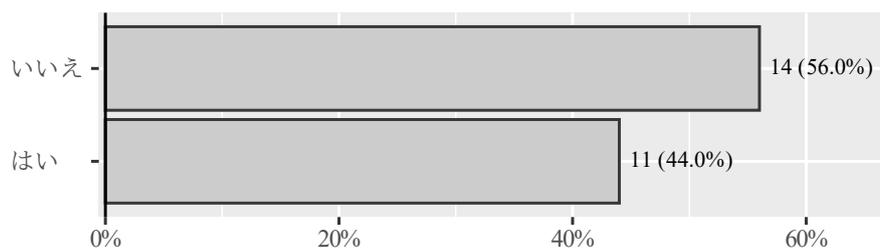


図7-16: 「学内の講義や研究指導以外に研究会や勉強会に参加したことがある」の回答

令和3年度大学院FDアンケート（教員対象） 集計結果報告

1. 令和3年度教員対象調査の概要

大学院現代商学専攻博士前期・後期課程の教育課程（カリキュラム）及び教育支援体制に関して幅広く学生から意見等を聴取し、今後の大学院指導に資することを目的として実施する。

2. 実施方法

現代商学専攻博士前期・後期課程に在籍する学生

3. 実施時期

令和3年10月18日（月）～11月19日（金）

4. 実施方法

対象者に、WEBアンケートシステムからメールで依頼し、回答してもらう。

5. 集計結果

アンケートの集計・分析は、大学院教育開発専門部会で行い公表する。本アンケート調査は、数量調査（5件法）と自由記述から構成されている。数量調査に関しては、数値が大きいほど高評価を示している。

6. 回答状況

対象者数は31名のうち30名から回答が得られ、回収率は96.8%であった。

7. 集計結果

7.1. 成績評価に関してコース内で共通した基準の必要性を感じる

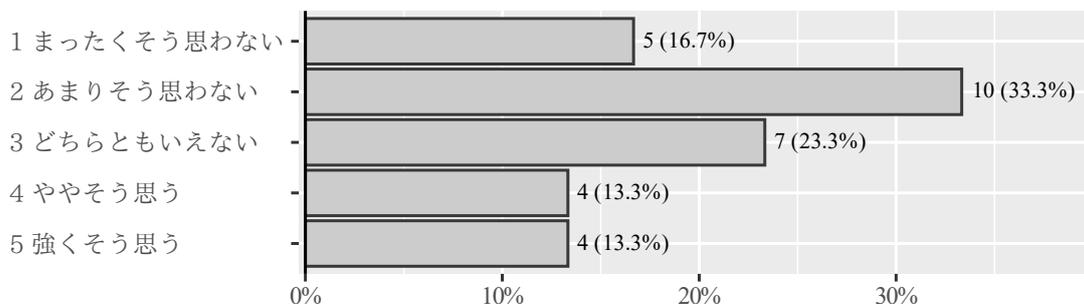


図7-1: 「成績評価に関してコース内で共通した基準の必要性を感じる」の回答

7.2. 成績評価に関してコースを超えて共通した基準の必要性を感じる

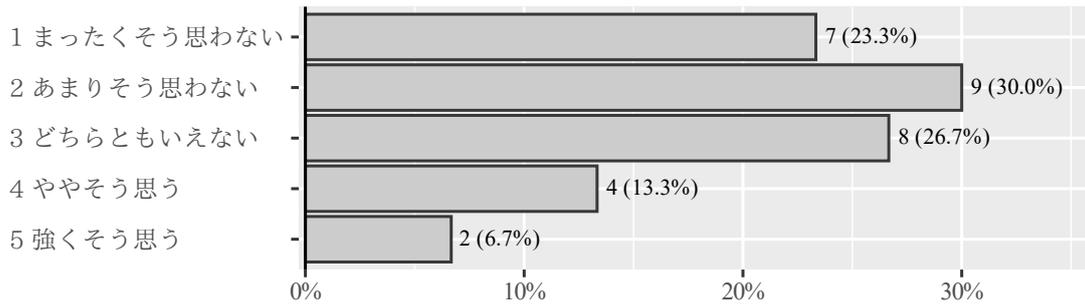


図7-2: 「成績評価に関してコースを超えて共通した基準の必要性を感じる」の回答

7.3. 院生に対してより幅広い研究交流活動を期待している

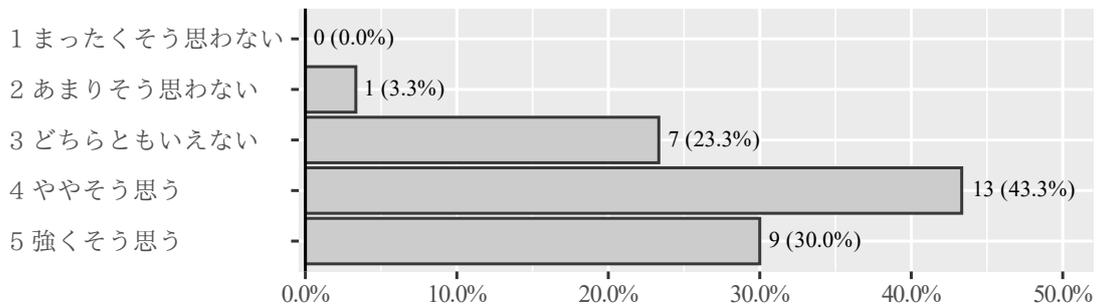


図7-3: 「院生に対してより幅広い研究交流活動を期待している」の回答

7.4. 各項目の平均値

「強くそう思う」から「まったくそう思わない」までの5段階の選択肢に対して5点から1点を与え、その平均値を集計示す。

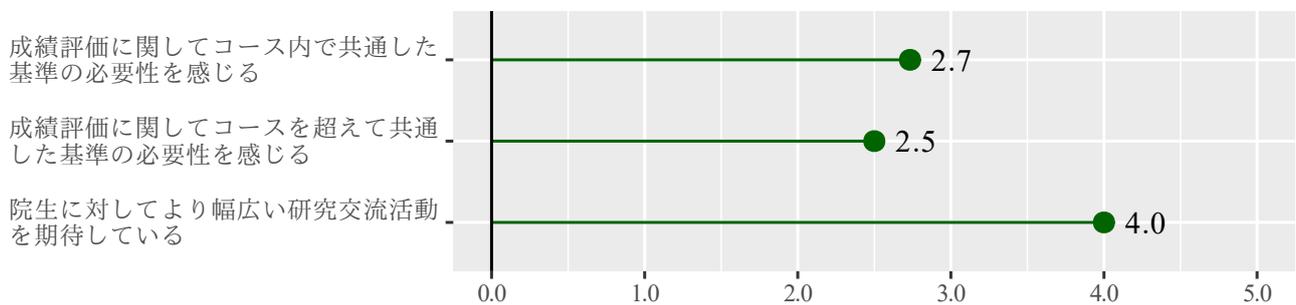


図7-4: 各設問の平均値

7.5. 研究指導や論文指導に関するご意見（自由記述）

- 人数が少ないことから、一人の受講生の講義になると、報告・発表中心の授業では、学生一人当たりの負担が多くなる。
- 実証的な方法が必要となる研究の場合、研究費が必要になります。特に、博士後期課程の学生は必須であり、教員研究費あるいは学生個人の私費を使わざるえない状況にあります。大学として何らかの予算措置をしないと、研究の質が上げられない状況にあります。
- 特記すべきことなし（これまで担当したことがないため）
- 修士論文として満たすべき水準について、本学の大学院としての基準を、単に抽象的なものではなく、具体的な基準として示してもらいたい。
- 修士課程の学生は、発表のプレゼンテーションをすること自体、少ないので、修士の中間報告会、最終報告会の他に、学会発表をしてもらうことが大切と考えている。発表をすることで自分の考えがはっきりするので、修士論文、執筆にも役立つ。
- 多面的な指導があるとより良いと思います。一部の教員のみが受け持っている状況であるので、様々な教員に受け入れて頂き、合同でゼミをする機会があるとよいと思いました。また評価においては有無ではなく人数で評価して頂ければと思っています。
- 分野的には他にも素晴らしい指導ができる教員が揃っているので十分対応できるかと。
- 成績評価に関しては、分野によって一般化しにくい部分もあるので、共通した基準等を厳格に定めることには一定の限界がある。もっとも、共通認識を形成するうえで基準を設定することも検討に値するものと思われる。
- 授業のみの担当ですので、研究指導や論文指導についての意見はありません。
- 特にございませぬ。
- 定期的に面談し、進捗の確認、内容に対するコメントをしている。これでほぼ問題ない。問題のあるような学生は入学を認めるべきでない。
- 学生が論文を英語で執筆することに積極的になって欲しい。
- 論文準備の段階において、発表の機会をもっと多く設けて、院生たちと教員の交流を増やすことを提案したい。

7.6. 研究指導や論文指導に関する問題点（自由記述）

- 特記すべきことなし
- 授業負担の不均衡
- コロナ禍中、ズームでやり取りをするのは難しかった。とくに、統計ソフトウェアの操作は、その場でこちらがやって見せた方が手っ取り早いのだが、ズーム越しだと、口頭で言わなければならず、こちらも、話を聞いている学生も大変だった。
- 論文指導では修士論文における日本語の校正が非常に大変です。日本語で論述するスキルを高める授業や、校正を担当する教員を置いて頂けるとありがたいです。
- 今後は本学だけの基準の見直しなどの改革でなく、3大学連携のプロジェクトと連動して検討すべきかと。
- 大学院存続のためには、優秀の大学院生の入学を促す必要がある。商大の学部生から大学院に希望するような流れを作る方策を考える必要があるようにも思われる。
- 特にありません。
- 特にございませぬ。

7.7. その他の意見（自由記述）

- 入学する予定の大学院生の興味・関心の対象がどこにあるのかという情報に教員がもう少し簡単にアクセスできれば、それを見てシラバスを作成できるようになり、双方にとって有益かと思ひ

ます。

- それぞれの領域やコースで意義や教育目的（研究者を育てるか実務家を育てるか等）が異なるため、評価の統一は難しいと考えます。
- 入学者も含め入学者数を確保するための無理な院生とりは今後他大学との連携もあり控えるべきかだと思います。これに加え、コース別に入学者数の割り当てを設定して達成したコースは研究費を増額し、達成されないコースは研究費を減額するなどの措置が必要かと。他の2大学との大学院科目の連携（単位互換）も進めて一体として運用する時期に来ているかと。
- 大学院に一定人数が入学するよう、継続した取り組みが必要だと思う。リカレント教育（社会人の学び直し）について本学大学院をどのように位置づけるかの議論が必要であり、また、論文指導の経過やキャリアパスを可視化し、広報活動と連携していくなどの取り組みも必要であろう。
- 特にございませぬ。
- 大学院入試の際に、英語もしくは日本語のコミュニケーション能力をきちんと審査すべき。コミュニケーションが取れない学生を任せ、指導で疲弊した経験がある。

7.8. 学内において研究指導に必要な資料が整備されている

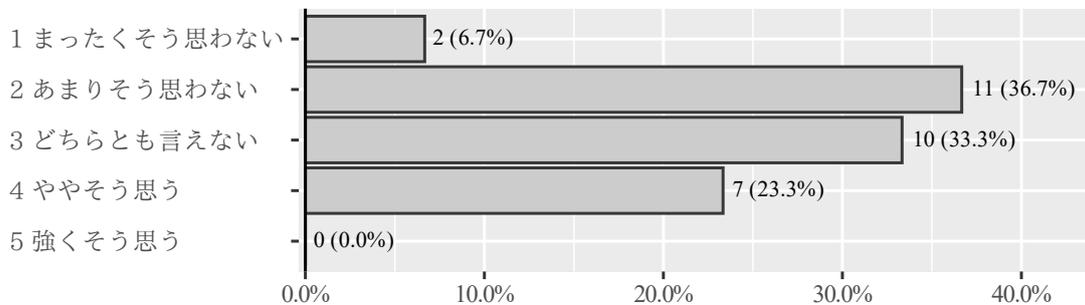


図7-5: 「学内において研究指導に必要な資料が整備されている」の回答

7.9. 図書資料（書籍・論文）の収集に関する学生の知識は十分である

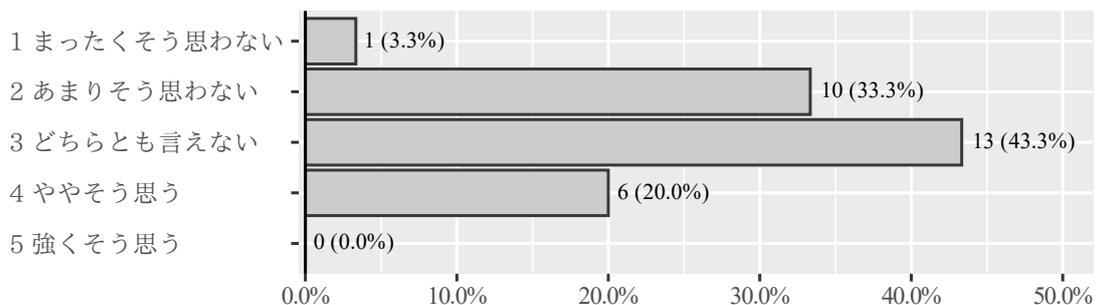


図7-6: 「図書資料（書籍・論文）の収集に関する学生の知識は十分である」の回答

7.10. 学生の研究活動に必要な環境が整備されている

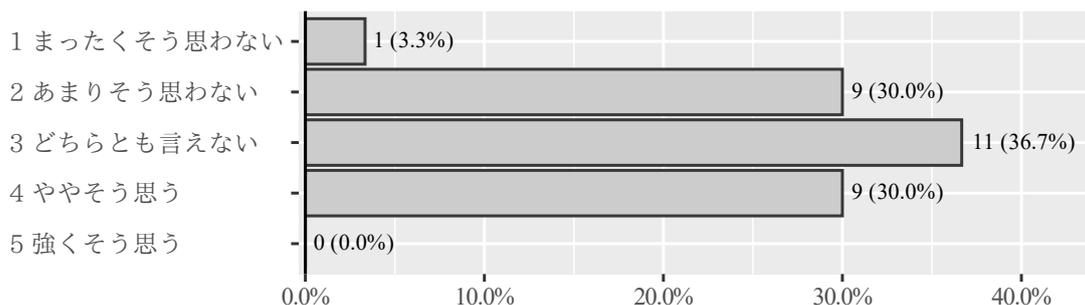


図7-7: 「学生の研究活動に必要な環境が整備されている」の回答

7.11. 各項目の平均値

「強くそう思う」から「まったくそう思わない」までの5段階の選択肢に対して5点から1点を与え、その平均値を集計示す。

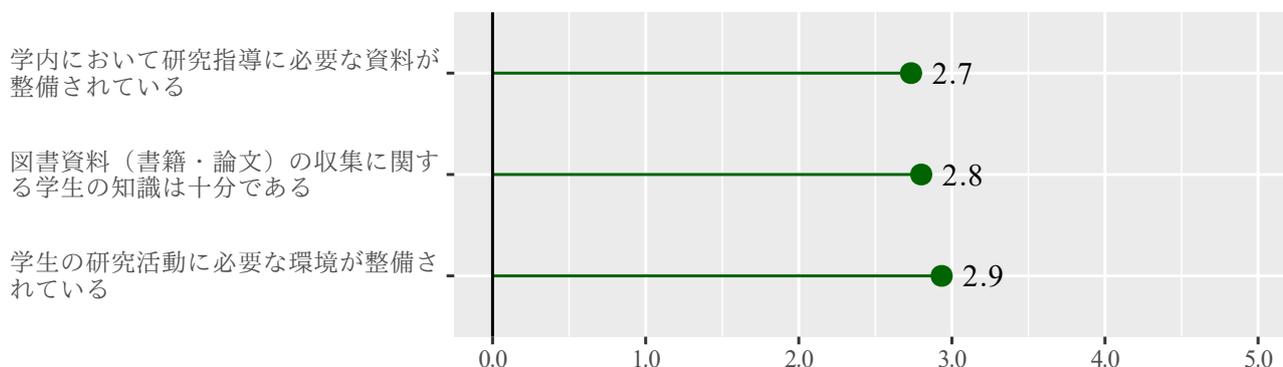


図7-8: 各設問の平均値

7.12. 図書資料・電子ジャーナル等や設備に関する意見（自由記述）

- 企業法学科教員が指導する大学院生は法令、判例を資料として使います。現在、本学ではそのためのツール DB として D1-Law が利用可能です。ただ、現在の契約内容では法律の改正経過が追えず、法改正、および、それに伴う判例変更の研究に支障をきたしています。上記 DB は学科経費で購入していますが、法令沿革が追跡可能な契約内容にするには予算不足です。この点を全学的な予算でカバーしていただけると助かります。
- 修士論文を作成するには当該テーマについての多様な資料が必要となるが、そのテーマについて研究している教員がいない場合には、本学の図書館では資料が不十分であり、十分な資料を収集することができない。現状の院生・学部生教養で、教員が選書する図書予算では全く不十分であり、院生が自ら研究する上で必要な資料を選択し、図書館に入れてもらえるように選択できる制度が必要ではないか。
- 大学院生枠の学生図書予算を特定して欲しい。
- 特定の専門分野に電子ジャーナルが集中している。方針を決めて、電子ジャーナルの購入タイトルを決めて欲しい。
- 不十分
- 電子ジャーナルは、どのようにして検索すればよいのか、よく分からないので、結局、Web 上での文献検索に頼った。
- 電子ジャーナル、財務情報データベースは充実して貰いたい。ProQuest、日経 Needs など。また、統計ソフト SPSS の Amos を複数ライセンス分導入して貰いたい。
- 統計ソフトの AMOS がないのは致命的だと思います。今のところ学割キャンペーンがあるため、個人で1年間のライセンスを数千円で買ってもらっていますが、コロナ禍に配慮した学割キャンペーンであるため、今後廃止される可能性があります。是非購入して頂きたいです。電子ジャーナルは不十分だと思います。修士論文レベルならば問題ないかもしれませんが、博士論文の場合、都度購入するジャーナルが膨大に出てきそうな気がします。自分が論文等を書くときは毎回購入しなければならない状況が生じています。
- 大学院レベルについて、研究指導に関する図書資料、電子ジャーナル等をより充実させることが望ましいと感じる。
- 予算の問題がありますが、できる限り、現在の質・量を落とさないようにしていただきたいと思っています。
- 特にございません

- 必要な論文が収集できない場合がある。
- ネット時代に手に入れない公開情報はないのでは。文句を言うほど困っていない。
- 本学が購読している電子ジャーナルだけでは必要な論文へのアクセスが限られており、十分な先行研究レビューを行うことが困難である。これは予算の問題であるが、総合大学と比べて本学の資源が不十分であるため、優秀な教員を獲得する面、優秀な学生志願者を募る面、また教員の研究環境の面でも、研究しやすい環境が整っていないため競争優位性がありません。今後3大学統合によるコンソーシアムなどで力を合わせ、より豊富な電子ジャーナルデータベースを導入することなどを検討していただきたい。
- 言語学のオンラインジャーナルを増やして欲しい。特に中国語と関連するジャーナルや書籍を増やして欲しい。
- やはり専攻によって充実していない分野もあるため、図書資料や電子ジャーナルには不安もあります（もっとも、多くは近隣の大学を利用できれば問題はないともいえるかもしれません）それと、院生が文献複写依頼や資料借用願の利用方法を必ずしも把握していない様子も伺われましたので、その辺りはあらかじめ知らせておく機会があれば良いかなと思います。すでにありましたら、すみません。
- 中国からの留学生が圧倒的に多いことから、海外、とりわけ中国関連の資料をもっと充実すべきです。

7.13. 授業方法の改善のため組織的な取り組みが必要である

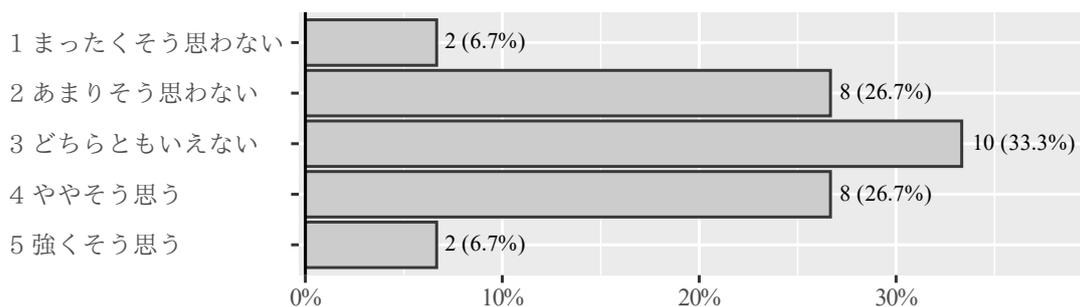


図7-9: 「授業方法の改善のため組織的な取り組みが必要である」の回答

7.14. 本学大学院で行うべきFD活動についての意見（自由記述）

- 博士後期課程については、大学を超えた連携ができるような環境が必要に思う。
- 特記すべきことなし
- 特になし
- 指導担当大学院生を持っていない教員に、大学として大学院生に要求する具体的な基準を示して、専門分野に限定されない各コース内で共通の内容を指導させる。
- 大学院生の数の多いマーケティング関連であれば、所属大学院生に共通することがらがありそうで、それをFD活動で共有すればよいと思う。学科で、大学院生が一人という状況では、個々の状況に合わせて個別に対応していればそれで済んでしまうように思う。
- 学部で行う大人数の授業とは大きく異なり、大学院の授業は受講者個人の興味・目的・資質に合わせて実施されるべきであるため、標準化は不要であると思います。しいて言えば、研究方法に関するFDは行っても良いかもしれませんが。方法論についてはゼミで教えることになっておりますが、体系だったものではないため、科学哲学や方法論に精通した方がFDを行うか、直接大学院生にご指導頂いても良いのではと思いました。
- 人数が限られているが、一定程度のFD活動も試してみる価値はあるものと思われる。

- 大学院生の意見を聞きながら、授業改善を行なっていくのが良いと思います。
- 使用するソフトウェアなどは、共通のものを推奨していった方が良いかもしれません。R や Python など。
- 特にない。

7.15. 博士前期課程の研究指導における教育効果についての意見（自由記述）

- 研究指導 I II III は、自分の担当学生と個別に話せる点で教育効果は高いと思う。
- 受講生も指導側も複数名で授業を行うと、様々な視点から意見交換ができ教育効果が高まると思います。
- 先生が研究していれば、学生も最新研究を学ぶことができる。学術論文を書いていない教員には博士学生の指導をやらせるべきじゃない。
- 研究指導という科目それ自体に効果があるかどうかは、正直なところ不明です。必要なことは他の研究科目でも適宜指導することになりますし。

7.16. 博士前期課程の研究指導における問題点（自由記述）

- 先ほどの質問にも記載した通り、日本語での論述スキルが低い留学生が多いため、そのための授業や、修士論文作成における校正担当者や、校正を外注するならそのための予算があればよいと思います。
- アカデミック・トレーニング（特に研究方法論）は各指導教員に任せられているため、その教員の強みである研究方法しか学生に指導できないといった状況になっています。複数の方法論を進学類の院生に組織的に各方法論〔定性・定量〕の講義を別途提供する必要があると感じます。
- 制度がどうなっているのか存じ上げないのですが、アカデミックトレーニングの類は、必修にしてもよいように思われます。

7.17. 博士後期課程の研究指導における教育効果や問題点についての意見（自由記述）

- 先ほどの質問にも記載した通り、日本語での論述スキルが低い留学生が多いため、そのための授業や、修士論文作成における校正担当者や、校正を外注するならそのための予算があればよいと思います。
- アカデミック・トレーニング（特に研究方法論）は各指導教員に任せられているため、その教員の強みである研究方法しか学生に指導できないといった状況になっています。複数の方法論を進学類の院生に組織的に各方法論〔定性・定量〕の講義を別途提供する必要があると感じます。
- 制度がどうなっているのか存じ上げないのですが、アカデミックトレーニングの類は、必修にしてもよいように思われます。

第3章 大学院商学研究科
(アントレプレナーシップ専攻)

令和3年度 「授業評価アンケート」集計結果と分析

令和3年度授業改善アンケート集計結果と分析

グローバル戦略推進センター

専門職大学院教育開発専門部会

1. はじめに

本報告書は、令和3年度に開講した全科目（41科目）の「授業改善アンケート」の集計結果とその分析結果、ならびに「成績評価」の集計結果とその分析結果を取りまとめたものである（「特殊講義Ⅰ（ノースウェスタン大学集中講義）」については、コロナ禍により非開講）。

「授業改善アンケート」は、授業参観による「同僚評価」と教員自身による「自己評価」をもとに、授業の改善に結びつくヒントを探ろうとするものであり、これらを活用することで、より品質の高い教育の提供を図るものである。これに対して、「成績評価」は本専攻の在學生ならびに修了生による学習活動の成果を確認し、より一層の能力向上を図ろうとするものである。さらに、今年度前期から、教学IR室に協力を依頼し、本報告書の集計をより分かりやすい表記にすべく、助力を得ている。

なお、以下では「授業改善アンケート」のことを指して「アンケート」と表記している。

2. アンケートの概要

2.1 質問項目

アンケートは20項目からなり、それぞれの質問項目は以下のとおりである。なお、質問項目1、2、4は五点尺度の回答と併せて自由記述による回答を、質問項目18、19、20は自由記述による回答を求めている。

1. カリキュラム

本科目は、下記の【カリキュラム・ポリシー】と照らして、十分に整合していますか。

2. 学力/資質/能力

本科目の授業内容は、本専攻が目指している【学生に身につけさせたい学力・資質・能力や養成する人材像】と照らして、十分に整合していますか。

3. シラバス整合性

本科目の授業内容は、シラバスに記載された授業の目的と照らして、十分に整合していますか。

4. 理解促進

本科目では、ケース・メソッドの導入や各種エクササイズの実施、対話・討論型の授業運営、多彩なメディアや情報機器の活用など、履修生の理解を促しスキルの習得に資する工夫がみられましたか。

5. 説明

授業における教員の説明（話し方の明瞭さやパワーポイントの見やすさを含む）は、分かりやすかったですか。

6. 資料

授業で用いられた題材や資料は、授業を理解する上で適切なものでしたか。

7. グループワーク

授業で行われたグループワークやグループディスカッションについて、そこから得るものがありましたか。

8. ディスカッション

プレゼンテーションや全体ディスカッション（質疑応答を含む）について、そこから得るものがありましたか。

9. 時間外学習

本科目では、授業時間以外の学習（例えば、事前・事後の課題、予習、復習等）について、その必要性がどのくらいあると思いますか。

10. シラバス時間外/学修管理システム時間外

本科目における事前・事後の課題や教室外での学習等について、シラバスではその内容が適切に記述されていましたか。また、学修管理システム等で適宜、適切に周知されていましたか。

か。(シラバスにおける内容の適切さ/学修管理システム等で適宜周知される内容の適切さ)

11. 事前課題

事前課題は、授業を理解する上で役に立ちましたか。

12. 事後課題

事後課題ないしレポートの作成から得るものがありましたか。

13. コメント

課題・レポート返却のタイミングや、コメントは適切なものでしたか。

14. 時間外対応

授業時間外での対応について、相対による教員の対応や学修管理システムを活用した対応は適切でしたか。

15. シラバス内容/学修管理システム内容

シラバス等において、モジュールごとの授業内容の記述は適切でしたか。(シラバスにおける内容の適切さ/学修管理システム等で適宜周知される内容の適切さ)

16. シラバス成績/学修管理システム成績

シラバスに記載された成績評価の方法・基準について、その内容は適切に記述されていたか。また、学修管理システム等で適宜、適切に周知されていたか。(シラバスにおける内容の適切さ/学修管理システム等で適宜周知される内容の適切さ)

17. 満足度

本科目の授業について、満足しましたか。

18. 評価点

本科目の授業について、良かった点をお知らせください。(5つまで)

19. 改善点

本科目の授業について、こうすれば良かったという点をお知らせください。(5つまで)

20. 自由記述

その他お気づきの点がございましたらご記入ください。

なお、アンケートは各質問項目については5段階評価を行っており、評価対象の授業において該当しない質問項目については分岐させている。

2.2 対象科目と調査の全体的概要

アンケートは、令和3年度に開講した41科目全科目で実施し、各科目の回答者数は以下のとおりである。令和3年度のアンケート回収率は92.7%であり、昨年度の83.2%より上昇した。これは、アンケート回答の時間を、可能な限り授業時間中に設けるようにしたこと、回答方法を今年度前期よりWebシステムへ移行したこと、未回答者への督促などによる効果とみられる。本アンケート調査は、FD基礎資料としてのみならず、認証評価においても重要なデータとなっており、回収率維持・向上のために引き続き注力していきたい。

2.3 基本科目

科目	担当教員	対象者数	回答者数	回答率
経営戦略Ⅰ	李濟民	36	35	97.2%
マーケティングⅠ	近藤公彦	35	33	94.3%
経営組織Ⅰ	西村友幸	35	34	97.1%
アカウンティングⅠ	堺昌彦	34	33	97.1%
ファイナンスⅠ	手島直樹	36	35	97.2%
ビジネス倫理	南健悟	32	31	96.9%

2.4 基礎科目

科目	担当教員	対象者数	回答者数	回答率
ビジネスシミュレーション	堺・芝・椎 名・谷・渡部	22	21	95.5%
経営戦略Ⅱ	玉井健一	22	21	95.5%
マーケティングⅡ	猪口純路	21	16	76.2%
経営組織Ⅱ	林亜衣子	27	24	88.9%
経営組織Ⅲ	西村友幸	10	9	90.0%
アカウンティングⅡ	堺昌彦	23	21	91.3%
アカウンティングⅢ	乙政佐吉	9	9	100.0%
ファイナンスⅡ	手島直樹	13	13	100.0%
ビジネス法務Ⅰ	多木誠一郎	7	5	71.4%
経済学・分析手法Ⅰ	吉地望	14	11	78.6%
経済学・分析手法Ⅱ	谷祐児	9	8	88.9%
ベンチャー経営Ⅰ	瀬戸篤	7	7	100.0%
地域経済・経営Ⅰ	宇田川耕一	13	9	69.2%
地域経済・経営Ⅱ	千葉俊輔	9	8	88.9%
地域経済・経営Ⅲ	小高咲	7	7	100.0%
ビジネス英語Ⅰ	浦島久	8	7	87.5%

2.5 発展科目

科目	担当教員	対象者数	回答者数	回答率
統合科目 I	内田純一	22	20	90.9%
統合科目 II	鈴木真人	22	22	100.0%
統合科目 III	李濟民	5	5	100.0%
統合科目 IV	太田稔	23	21	91.3%
アカウンティング IV	松本康一郎	7	7	100.0%
ファイナンス III	齋藤一朗	6	6	100.0%
ビジネス法務 II	小寺・富田・ 太田	17	15	88.2%
ベンチャー経営 II	瀬戸・武田	3	3	100.0%
ベンチャー経営 III	坂本英樹	21	20	95.2%
ビジネス英語 II	小林敏彦	9	8	88.9%
ビジネス英語 III	小林敏彦	6	5	83.3%
特殊講義 II	李濟民	10	10	100.0%
特殊講義 III	籾本・玉井・ 猪口・金子	6	4	66.7%

2.6 実践科目

科目	担当教員	対象者数	回答者数	回答率
ビジネスプランニング I	内田純一	33	31	93.9%
ケーススタディ I	堺昌彦	35	32	91.4%
ビジネスプランニング II	齋藤・手島・ 内田・藤原・ 奥田・太田・ 井馬	32	30	93.8%
ケーススタディ II	堺・玉井・猪 口	34	31	91.2%

2.7 ビジネスワークショップ

科目	担当教員	対象者数	回答者数	回答率
ビジネスワークショップ	李濟民	32	30	93.8%
リサーチペーパー	李濟民	32	30	93.8%

2.8 全体の回答率

対象者数	回答者数	回答率
784	727	92.7%

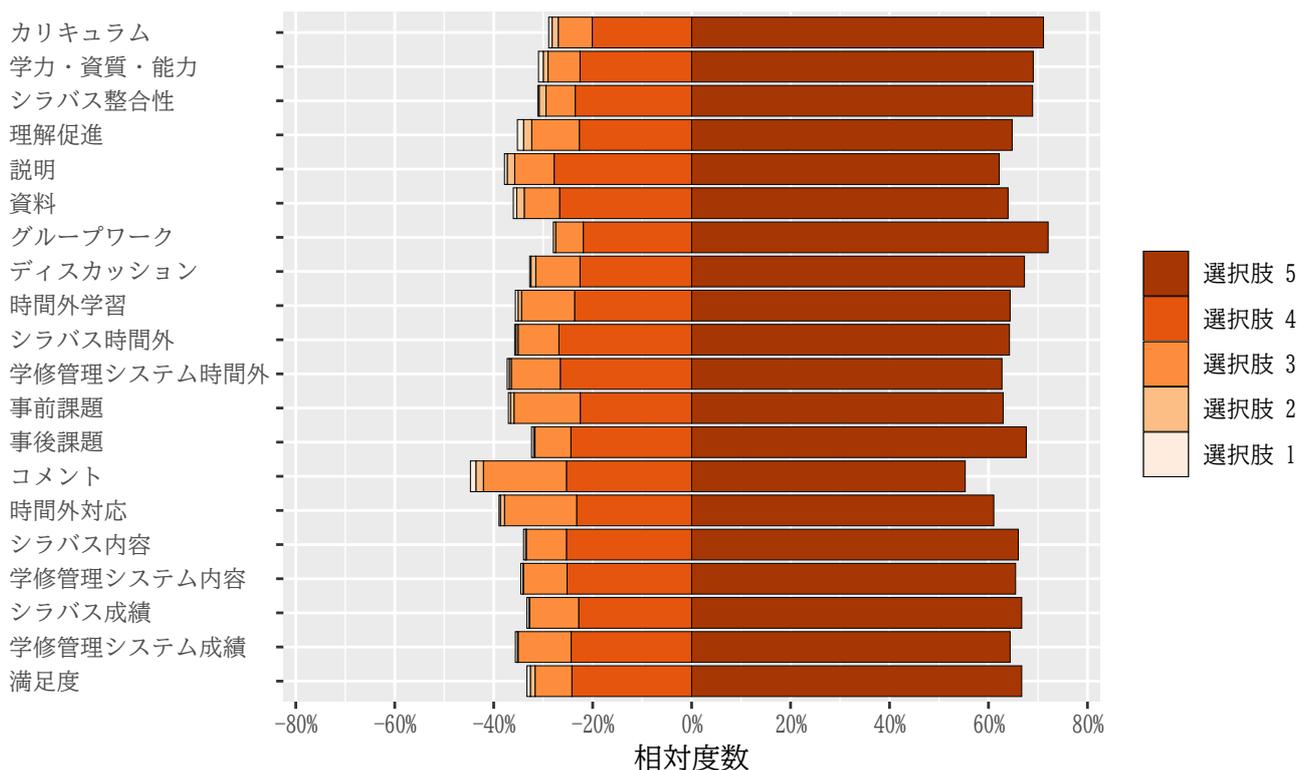


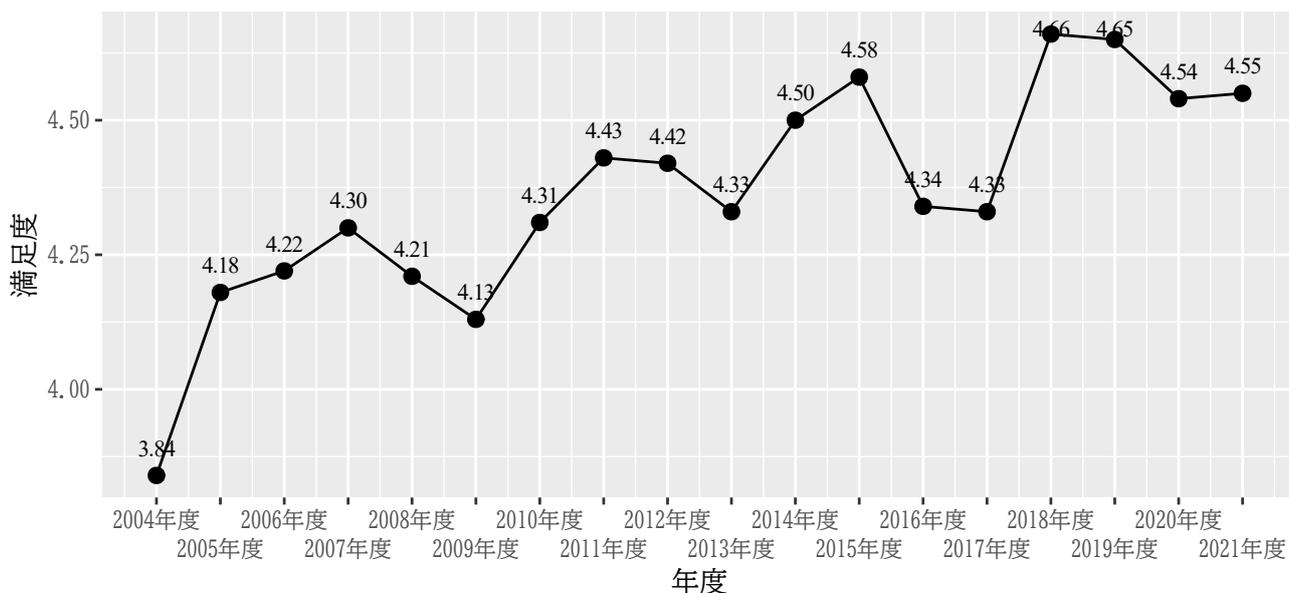
図2-1: 各項目の回答割合

※ リカレント受講生の受講についても、対象者数に含めている。

各質問項目に対する5段階評価の評価合計数と、各質問項目の平均評価値については、以下のとおりである。

	選択肢 1	選択肢 2	選択肢 3	選択肢 4	選択肢 5
カリキュラム	5 (0.7%)	9 (1.2%)	50 (6.9%)	146 (20.1%)	517 (71.1%)
学力・資質・能力	7 (1.0%)	7 (1.0%)	47 (6.5%)	164 (22.6%)	502 (69.1%)
シラバス整合性	2 (0.3%)	10 (1.4%)	43 (5.9%)	171 (23.5%)	501 (68.9%)
理解促進	9 (1.2%)	12 (1.7%)	70 (9.6%)	165 (22.7%)	471 (64.8%)
説明	4 (0.6%)	11 (1.5%)	58 (8.0%)	202 (27.8%)	452 (62.2%)
資料	5 (0.7%)	11 (1.5%)	52 (7.2%)	194 (26.7%)	465 (64.0%)
グループワーク	0 (0.0%)	3 (0.5%)	36 (5.6%)	141 (21.9%)	464 (72.0%)
ディスカッション	2 (0.3%)	7 (1.0%)	65 (8.9%)	164 (22.6%)	489 (67.3%)
時間外学習	4 (0.6%)	5 (0.7%)	78 (10.7%)	172 (23.7%)	468 (64.4%)
シラバス時間外	2 (0.3%)	3 (0.4%)	60 (8.3%)	195 (26.8%)	467 (64.2%)
学修管理システム時間外	3 (0.4%)	3 (0.4%)	72 (9.9%)	193 (26.5%)	456 (62.7%)
事前課題	3 (0.4%)	5 (0.7%)	94 (13.4%)	158 (22.5%)	442 (63.0%)
事後課題	3 (0.4%)	2 (0.3%)	52 (7.3%)	175 (24.4%)	485 (67.6%)
コメント	8 (1.1%)	11 (1.5%)	122 (16.8%)	184 (25.3%)	402 (55.3%)
時間外対応	2 (0.3%)	6 (0.8%)	106 (14.6%)	169 (23.2%)	444 (61.1%)
シラバス内容	3 (0.4%)	1 (0.1%)	59 (8.1%)	184 (25.3%)	480 (66.0%)
学修管理システム内容	3 (0.4%)	1 (0.1%)	64 (8.8%)	183 (25.2%)	476 (65.5%)
シラバス成績	3 (0.4%)	1 (0.1%)	72 (9.9%)	166 (22.8%)	485 (66.7%)
学修管理システム成績	3 (0.4%)	1 (0.1%)	78 (10.7%)	177 (24.3%)	468 (64.4%)
満足度	5 (0.7%)	7 (1.0%)	54 (7.4%)	176 (24.2%)	485 (66.7%)

5段階評価の結果をみると、ポジティブな選択肢4と5がほとんどで、「コメント」を除く全ての項目において選択肢5が6割超となっている。ネガティブな選択肢1や2については極めて少ない。



※2021年度は前期科目のみの数値

図2-2: 満足度の推移

図2-2は、2004年度から今年度前期までの満足度の推移を示したものであり、満足度は長期的に上昇傾向にある。アンケートによって測定されている項目については、概ね高い評価を得られており、授業設計・運営の質を一層高めていくためには、新たな評価項目の検討と設定が重要であると思われる。なお、項目間での相対評価で見ると、前年度と同様に「コメント」「時間外対応」の評価が相対的に低いが、後節でみるように満足度との相関が特に高い項目ではなく、改善の優先度は低い項目と言える。ただし、これらの項目についても、高い評価を得られている授業について、その方法の情報やノウハウの共有を図ることで、より効果的な授業について議論をおこなうことは有益だろう。

3. アンケートの分析

3.1 「教員の教授法について」の分析

各質問項目間の相関係数については、表3-1に示したとおりである。これらの中から、満足度との相関関係および各質問項目の平均点を抽出したものが表3-2、それに基づき散布図を描いたものが図3-1影響度－パフォーマンス・マトリクスである。

パフォーマンス・マトリクスにおいて、相対的に満足度との相関が高くかつ評価も高い右上のエリアに位置する項目は、本専攻の「強み」と考えられる。満足度との相関が高いにも関わらず評価が低い右下のエリアに位置する項目は、本専攻において「優先的に改善が必要」と考えられる。評価が低い項目ではあるが満足度との相関が低い左下のエリアに位置する項目は、「改善の優先度は低い」と考えられる。ただし、個別の不満の内容は十分に検討すべきである。満足度との相関が低いものの高い評価を得ている左上のエリアに位置する項目は、当面は現状を維持していけばよいと考えられる。

3.1.1 本専攻の「強み」

令和3年度を通したデータに基づいてみると、本専攻の大きな「強み」は「学力/資質/能力」「カリキュラム」「シラバス内容」「ディスカッション」、「シラバス成績」、「学修管理システム成績」、そして「資料」である。本専攻の各授業およびカリキュラムが、学生に見つけさせたい学力/資質/能力に照らして体系立って編成されており、また、ディスカッションによる学習が学生個々の能力の向上につながっていること、さらにシラバスや学修管理システムを通じて授業内容や成績評価に関する適切な情報周知がなされていると実感されていることが示されている。

3.1.2 「優先的に改善が必要な項目」

他方で、本専攻において「優先的に改善が必要な項目」としては「説明」「理解促進」が挙げられる。コロナ禍における ZOOM による遠隔授業によって、理解促進のための多様な手法とメディア活用が制限されていた影響も考えられるが、説明のわかり易さ、教員による受講生の理解促進は授業品質の根幹をなす部分だと考えられることから、これらの項目については改善に向けた具体的な対応策の検討が必要である。

表3-2: 満足度と各項目の相関係数および評価の平均値

項目	全体満足との相関	評価の平均
カリキュラム	0.622	4.597
学力・資質・能力	0.663	4.578
シラバス整合性	0.559	4.594
理解促進	0.643	4.481
説明	0.674	4.495
資料	0.689	4.517
グループワーク	0.579	4.655
ディスカッション	0.603	4.556
時間外学習	0.436	4.506
シラバス時間外	0.634	4.543
学修管理システム時間外	0.595	4.508
事前課題	0.479	4.315
事後課題	0.555	4.523
コメント	0.545	4.322
時間外対応	0.577	4.440
シラバス内容	0.604	4.564
学修管理システム内容	0.599	4.552
シラバス成績	0.659	4.553
学修管理システム成績	0.641	4.521
満足度	1.000	4.553

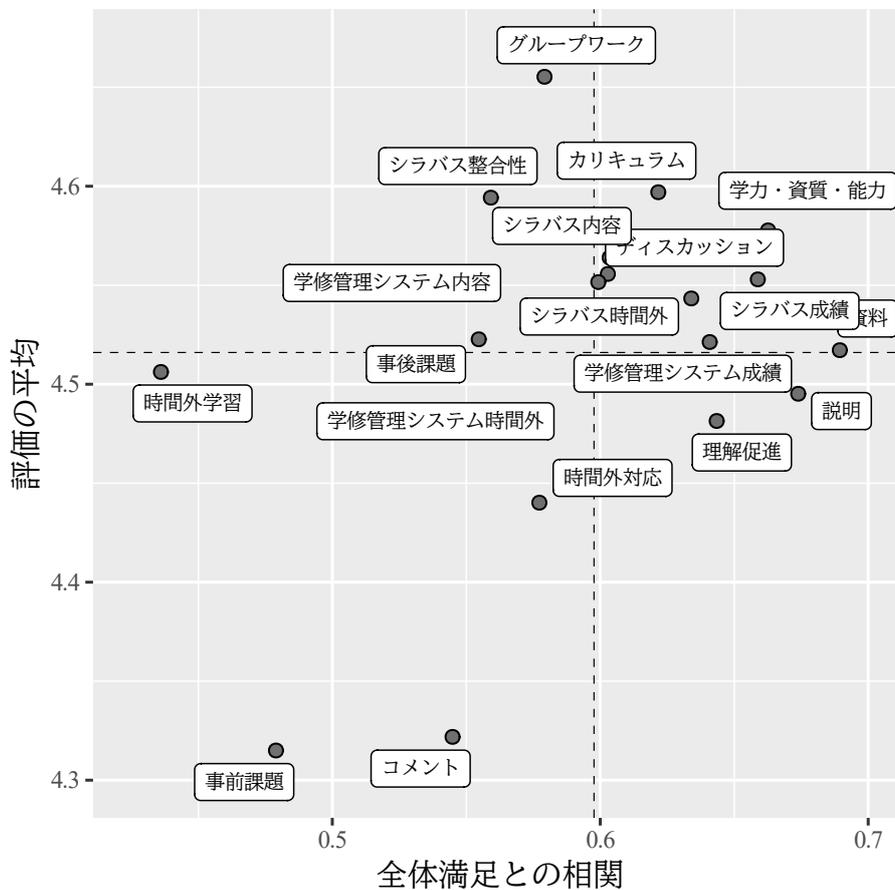


図3-1: 影響度-パフォーマンス・マトリクス

4. 各科目の成績分布

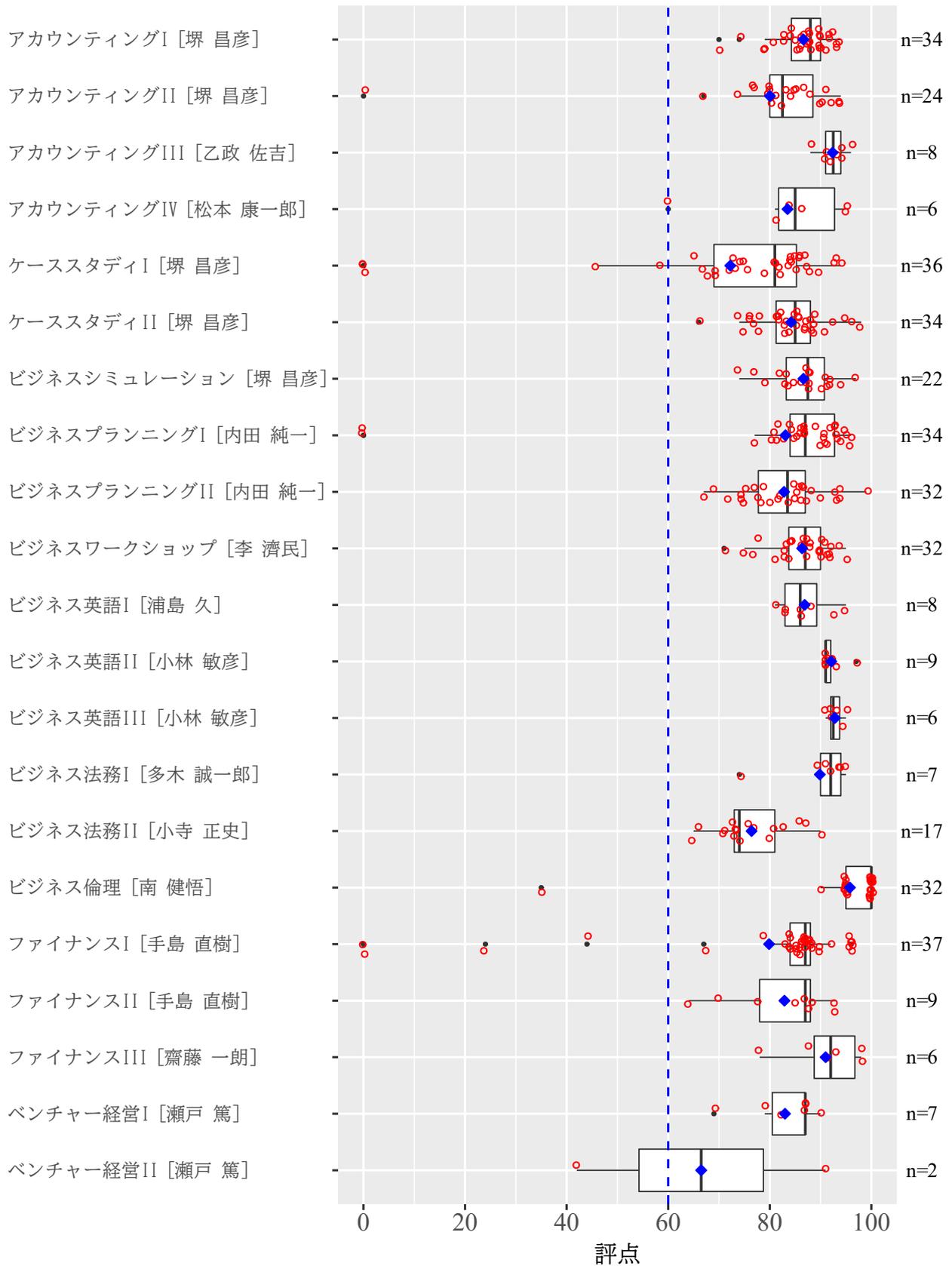


図4-1: 各科目の成績分布 (1)

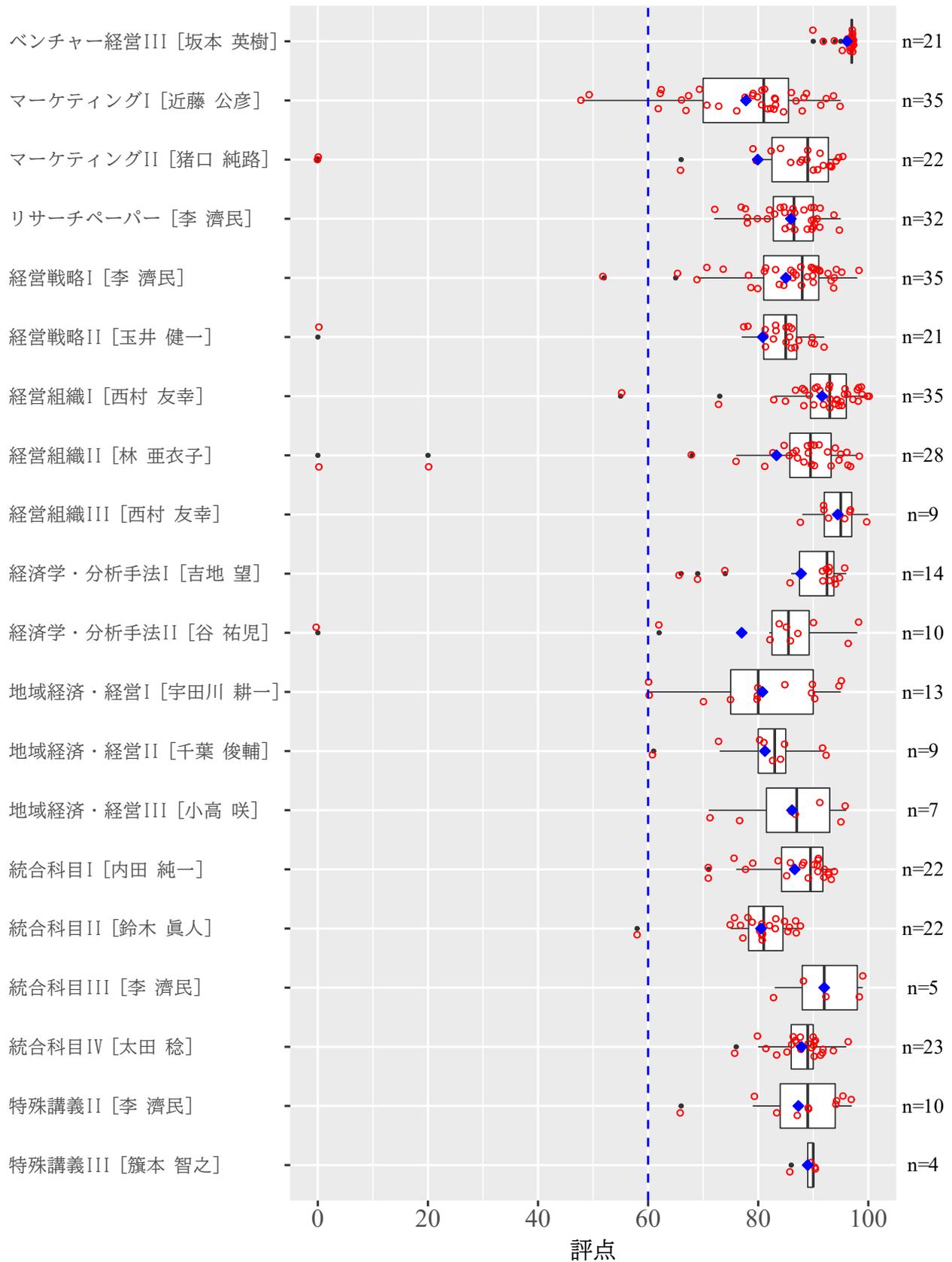


図4-2: 各科目の成績分布 (2)

ほぼ全ての科目において、成績分布に極端あるいは不可解な偏りは見られず、本専攻「シラバス作成のためのガイドライン」に沿って作成・公表されている成績評価の方法に従った適切な評価が行われているとみられる。ただし、ベンチャー経営Ⅲについては、平均点が非常に高得点かつ分散が極めて小さい状況にあり、成績評価は教員の専権事項ではあるものの、その経緯については一度確認をしてみても良いだろう。なお、「ビジネス倫理」においては、多数の満点層と満点でこそないが高得点層を中心とする2項分布しているように見受けられるが、倫理観そのものを評価するといったことは必ずしも適切でないことや、倫理に関わる課題への取組や授業への貢献度、プレゼンテーションなどは、評価に差がつきにくいといった科目特性によるものと理解できる。

5. 各科目の集計結果

基礎科目	ビジネスコミュニケーション	21	4.52	4.57	4.62	4.43	4.52	4.43	4.43	4.33	4.57	4.62	4.38	4.48	4.43
基礎科目	経営戦略Ⅱ	21	4.48	4.38	4.24	4.14	4.19	4.48	4.48	4.57	4.48	4.43	4.52	4.38	4.19
基礎科目	マーケティングⅡ	16	4.62	4.62	4.50	4.62	4.44	4.50	4.50	4.50	4.50	4.56	4.56	4.50	4.50
基礎科目	経営組織Ⅱ	24	4.33	4.17	4.42	4.12	4.21	4.38	4.33	3.96	4.29	4.33	4.38	4.38	4.21
基礎科目	経営組織Ⅲ	9	4.89	4.78	5.00	4.78	5.00	5.00	4.89	4.89	4.67	4.78	4.78	4.78	5.00
基礎科目	アカウンティングⅡ	21	4.71	4.67	4.81	4.71	4.71	4.57	4.57	4.71	4.76	4.76	4.76	4.76	4.71
基礎科目	アカウンティングⅢ	9	4.67	4.78	4.89	4.44	4.78	4.78	4.78	4.78	4.78	4.78	4.78	4.78	5.00
基礎科目	ファインダンスⅡ	13	4.77	4.62	4.77	4.69	4.77	-	3.69	4.15	4.77	4.77	4.85	4.92	4.69
基礎科目	ビジネス法務Ⅰ	5	4.80	4.60	4.60	4.80	4.60	4.80	4.80	4.40	4.60	4.40	4.60	4.60	4.80
基礎科目	経済学・分析手法Ⅰ	11	4.82	4.82	4.73	4.73	4.82	4.64	4.73	4.55	4.73	4.64	4.73	4.64	4.82
基礎科目	経済学・分析手法Ⅱ	8	4.75	4.62	4.88	4.62	4.75	4.67	4.50	4.25	4.62	4.88	4.62	4.50	4.88
基礎科目	ベンチャー経営Ⅰ	7	4.86	5.00	5.00	5.00	4.86	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00
基礎科目	地域経済・経営Ⅰ	9	4.56	4.44	4.44	4.56	4.44	4.56	4.56	4.33	4.67	4.56	4.56	4.44	4.33
基礎科目	地域経済・経営Ⅱ	8	4.75	4.88	4.88	4.88	4.88	4.86	4.88	4.50	4.62	4.88	4.75	4.75	4.88
基礎科目	地域経済・経営Ⅲ	7	4.71	4.71	4.86	4.86	5.00	4.86	5.00	4.71	4.57	4.57	4.86	4.71	5.00
基礎科目	ビジネス英語Ⅰ	7	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	3.71	4.86	4.71	4.86	4.86	5.00

6. まとめ

6.1 分析結果のまとめ

今回のアンケート調査と分析を通じて、以下の点が明らかとなった。

- アンケート回収率が92.7%と、前年度を大きく上回った。今年度は前期から大学の Web アンケートシステムを利用し、回答の利便性を向上させたり、メールによる未回答者への督促を行うなど調査方法を改善した。また前年度に引き続き、コロナ禍で実質的に Web のみの回収方法となったことも回収率の高さに影響していると考えられる。
- 全体の満足度は平均値が4.55となり、コロナ禍においても比較的高い評価を維持している。高い評価が得られた理由の把握と共有により、今後も高い評価を得られるような授業の設計・運営を行なっていく必要がある。
- 本専攻の強みは、「グループワーク」「学力/資質/能力」「カリキュラム」「ディスカッション」、そして「資料」である。昨年度に比べると、多くの項目が「強み」となっており、今後もそのさらなる強化、維持を目指すべきところである。なお、コロナ禍においてグループワークをリモート授業で行っているなかで、「グループワーク」及び「ディスカッション」が強みとなっていることは、リモート授業の質が改善している証と言えよう。
- 本専攻の前年度までの強みは、「シラバス整合性」「シラバス時間外」「事後課題」であり、本専攻の授業が合目的的に編成されており、シラバスを通して授業内容や授業時間外に求められる課題や学習が周知され、計画的に事後課題が課されていると学生が受け止めていた。しかし、今年度においては「シラバス整合性」と「事後課題」については、引き続き高い評価は得られているものの、それらの全体満足度との相関に低下がみられる。当面は「現状維持」とすべき項目であるが、全体満足度との相関の低下の背景について検討し、特段の問題がないかについては確認が必要である。
- 「優先的に改善が必要な項目」に分類されるのは「説明」、「理解促進」である。これら2項目は、昨年度においても「優先的に改善が必要な項目」とされていたにもかかわらず、今年度においても改善がみられていないことに加え、相対的な評価が特に低いことから、高評価を得ている教員との情報やノウハウの共有を研修会の開催等を通じて行い、個々の教員のスキルアップを図っていくことが必要である。

6.2 今回の研修で確認・議論しておきたい点

これまでのアンケート調査と分析の結果、また専攻教授会での意見を踏まえ、今回のFD研修においては、以下の点について確認や議論をおこないたい。

- 「説明」、「理解促進」が低いのはなぜか（リモートにマッチしていないのか）？
- どのようにすれば上述の2項目の評価を向上させられるか
- 「シラバス整合性」と「事後課題」の全体満足度との相関が低下した理由は？そしてそれらに対応は必要か？
- 先日の教授会でリモート授業において学生間の情報共有における工夫はあるか

授業評価アンケート結果を踏まえた自己評価（令和2年度後期科目）

科目区分	科目名	担当教員
基本	ファイナンス I	手島 直樹

今後も、グローバル水準の MBA の授業を行う。素早い質問対応を心掛け、学生の理解向上に取り組みたい

科目区分	科目名	担当教員
基礎	経営戦略 II	玉井 健一

MBA として学ぶべき中心的イノベーション論の講義を展開することができた。また、戦略・組織との関係を理解させる講義も展開することができた。ただし、一部において、理論の全体像を明確に説明することができなかった。理論構造、概念定義、現実との対応関係を再検討し説明を洗練させるよう努力したい。また、講義、グループディスカッションにおける時間管理をしっかりと行っていきたい。

科目区分	科目名	担当教員
基礎	経営組織 II	林 亜衣子

課題解決に必要な思考力と、組織の課題解決に不可欠なスキルを身に付けていただくための科目です。知識や理論を”活用する”、”実践する”ことに重点を置いています。心理学を含む異質な点も面白味の一つです。

科目区分	科目名	担当教員
基礎	アカウンティング II	堺 昌彦

本授業が目指すところは、戦略策定や業務改善のさまざまな局面においてどのような原価情報が適切であるのかを理解し、またそれらの局面において適切な原価情報を入手・活用することでより合理的な意思決定を行えるようになることである。

今回は、情報の理解と活用に関しては目指した水準を概ね達成できたが、それらと密接に関わりのある情報を作成するという部分については十分とは言えなかった。次年度以降は、この情報の作成という部分について、必要な理解と習熟が得られるように、演習課題の工夫とその運用について検討を行なっていく。

科目区分	科目名	担当教員
基礎	ビジネス法務 I	多木 誠一郎

経営者としてビジネスを法的視点から見ることの重要性、および、多様な法律の知識に基づいてビジネスを認識する方法を講義することができたと思われる。今後は、オムニバス方式の講義のメリットを活用し、多様性のある講義を一層洗練させるに加え、各教員間の専門性の融合を意識した講義を心がけていきたい。

科目区分	科目名	担当教員
基礎	経済学・分析手法Ⅱ	西山 茂

近年のビジネス統計分析の新たな発展に鑑み、「市場の発見・市場反応の測定・顧客の管理」というビジネスステージに応じたデータ分析技法を習得することが目的である。

分析実習のツールとしては、ビジネス現場で標準ツールの一つになっているRを採用した。

今年度は、リモートによるオンライン講義であったため講義の理解度などの把握が難しく、課題で判断している状況であった。また、受講生同士の議論もすることができなかった。議論をすることでより理解が深まることを期待できるため、今年度は講義の中で受講生同士が議論できるような講義を検討したいと考えている。

科目区分	科目名	担当教員
基礎	ベンチャー経営Ⅰ	瀬戸 篤

大変厳しい時間的制約の中で、各受講生は全力投球で講義準備を行い、また拙著『企業家精神講義』から多くを学んでくれたことに感謝する。

科目区分	科目名	担当教員
基礎	地域経済・経営Ⅱ	千葉 俊輔

2020年度は、すべてリモート授業となり、また履修生が18名と非常に多くなったことから、授業自体が一方的な講義となってしまった。その分、毎回提出の事後課題レポートについては、丁寧なコメントを付してきたが、やはり理解度のバラツキが生じてしまった。

2021年度は、履修生が8名と少ないことから、理解度を観察しながら丁寧が授業を心掛けるとともに、対面かリモートかに拘わらず、ディスカッションやグループワークを取り入れ理解促進に努めたい。

科目区分	科目名	担当教員
基礎	ビジネス英語Ⅰ	浦島 久

この年になってオンラインで授業をするのは考えてもいませんでした。瀬戸際に追い込まれてやったおかげで、新しい世界が広がりました。最近はオンラインのメリットがわかるように。辛抱強く私のつたない授業に付き合ってくれた学生に感謝しています。

科目区分	科目名	担当教員
発展	統合科目Ⅲ	李 濟民

おおむね目標していたことは達成できた。英語のテキストを原文で読むことで、国際経営の理論と実態をより深く理解することができた。さらにモジュール2以降のケース分析については、受講生自ら選択したものを発表し、討論することで、より深くコミットしてもらうことができた。これからもこの様な形式で進めていきたい。

科目区分	科目名	担当教員
発展	統合科目 IV	太田 稔

オンライン授業が主流となって2年目を迎えますが、受講生各位の努力と前向きな受講態度により無事に終了することができました。

ディスカッションに関する取り組み状況や熱量を図ることができないためにギクシャクする場面も多々ありましたが、事前課題・事後課題を読み返す限りは授業目標を達成したことに一安心しました。

比較的課題が多い科目の一つではありますが、実務と理論を行き来する実践科目を目指していることもありオンライン授業ではありましたが、その中でできる最大限のことはできたと思います。

これまでと違うのは、「持続可能な社会」や「SDGs」の関心が拡大するにあたり、OBSのカリキュラムに位置づけられる「戦略的CSR」の意味や位置づけも大きく変化するように感じます。

次年度の授業ではその辺りの最新の研究と実務情報も追加しながら、ビジネススクールらしい授業展開を検討していきたいと考えています。

最後に、コロナ対策の結果ではありますが札幌サテライトの機材が充実したこともあり、オンライン授業に対する質や効率性が上がったように感じます。サポートしてくださっている事務局の皆様へ感謝申し上げます。

科目区分	科目名	担当教員
発展	アカウンティング IV	松本 康一郎

グローバル・スタンダードとしての「国際財務報告基準 (IFRS)」の理解という学習目標は達成できたと思います。コロナ禍でのZoomによる授業でしたが、いずれの受講生も授業中に積極的に質問等を発しており、授業自体は活発に展開できたと思います。次年度は、モジュールの中間点辺りで、テーマを設けたひとコマ程度のディスカッションタイムを設けたいと思います。

科目区分	科目名	担当教員
発展	ファイナンス III	齋藤 一郎

本授業は、大括りに二部構成をとってきた。モジュール1~3では、金融取引の意義や金融取引に伴う諸々の困難を議論の口火切りとして、銀行がそれらの困難をいかにして解決し資金を円滑に融通するのかを、銀行のビジネスモデルに即して解説してきた。ここでは、銀行のビジネスモデルを理解するための基本的な視座を養うことを到達目標としてきた。モジュール4~8では、銀行のビジネスモデルに関わる理解を踏まえて、銀行財務の分析(Excelのシートでフォーマットを提供)やマクロ経営環境や競争環境に関する定性的な分析をグループワーク形式で行った。モジュール4~8の到達目標は、銀行経営が直面する経営課題を見だし、戦略的な打開策の構想力の涵養することに置いた。

科目別評価シート(令和2年度後期)においては、すべてのアンケート項目において全体平均を上回っており、授業に対する満足度も4.80となっている。自由記述欄においても、「金融機関マネジメントとはなっているが、OBSで学んだ経営学・分析手法の総まとめのような授業であった点。専攻したことにより、知識が体系化された」「履修者数が少なく、各自の発表に対し十分時間を掛けて議論できた」「担当教員が銀行業界で実務を経験され、道内金融機関に精通されているので一般的には知られていない業界の動向や情報を知る機会となった」「金融機関の業務、役割、

機能などを学ぶことが出来た。勤務している立場では気づかなかった内容が多く、大きな気付きがあった」「分析フレームの使い方について、指導を受ける事ができた。今まで知らなかった使い方、考え方を知ることが出来た」「自金庫の財務分析、組織分析、マーケティング分析により強みや弱みを理解することができました」「総合的な分析により戦略的な方向性を検討することができました」という声が寄せられている。

今後とも、受講者の関心のあるところを汲み取り、満足度の高い授業を心掛けたい。

科目区分	科目名	担当教員
発展	ベンチャー経営 III	坂本 英樹

ひろくベンチャービジネスに関連する経営理論ならびにフレームワークを修得することに関しては予定通りであったが、学習した経営理論を現実のビジネスとの関連でディスカッションすることに関しては、より議論の機会を増やすように心掛けたい。

科目区分	科目名	担当教員
発展	ビジネス英語 III	小林 敏彦

コロナ禍にあり、何よりも学習効果を最大限にあげるため、オンライン学習の強味を生かして、SNSを併用した授業と課題の管理を行うことで持続的な自律的英語学習習慣の形成ができたと思われる。特に、学期終了後もほぼ全員の受講生がそのままSNSを活用した日々のBBC放送のディクテーションおよび英作文、冠詞学習タスクを毎日継続しており、モチベーションの持続が観察できることは非常に喜ばしい限りであり、英語学習が将来学習であることの認識が共有されているものと感じられる。

科目区分	科目名	担当教員
発展	特殊講義 II	李 濟民

当科目の目標は、できるだけ地域医療を広くとらえて医療マネジメントだけではなく、歯科診療、介護サービス、ソーシャルビジネスを含む地域医療サービスの創出などヘルスケア全般におけるトピックスを毎回各分野を代表する専門家を招いて講義及び外部からの参加者を交えたグループワークを実施することであるので、他の科目とは大きく異なる。授業運営をさらにスムーズに行うことで、アントレ専攻の目玉講義になることを期待する。

科目区分	科目名	担当教員
実践	ビジネスプランニング I	内田 純一

本講義では、全4モジュール(4講連続講義×4日)の事後課題添削を通じ、目標①として、各種フレームワークの適切な使い方について指導しながら、目標②として、実現可能性が高く説得力を有するプランへ向けて最終モジュールまでに練り上げ式の指導も行っている。この過程を通じて、着実にステップアップが図られている点では、概ねこの目標は達成できていると自己評価している。

目的として掲げる分析能力と創発的能力・センスを身につけさせる部分については、受講生

によってその身に付き方に結構な差（評点差）が出ていることは事実である。その意味では目的達成にむけて、若干の課題があると言えるであろう。

目的を達成できていない点については、本講義が実習方式と添削指導の繰り返しにより進める講義であることの弱点が表面化してきているように思われる。レクチャー型の知識・スキルの集中指導は本講義の主目的ではないが、分析のための知識とその応用スキルは、他科目での習得を前提にしているため、受講生のビジネスプラン作成能力は、スタート時点で実際にはかなりの差がついている。本科目ではグループワークで実習が行われるため、他者の分析知識とその応用スキルをグループメイトが作業を通じて学び取ることを期待しているが、不運にもその知識・スキルに乏しいメンバーだけで構成されたチームがあると、学び合いに不都合が生じることもある。

これを避けるためには、ビジネスプランニングに必要な知識・スキルを本科目内で集中的に伝授することでカバーできる可能性があるが、土曜日に行う実践科目ではあまりそのために割く時間がとれないという事情もあるので、なかなか難しい問題である。この点については今後の課題としたい。

なお、学生による評価結果の値は、専攻全体の平均を全ての項目において下回っている。

自由記述欄の評価点と改善点はほぼ拮抗しており、本講義を評価する層と評価しない層が同数くらい存在するものと考えられる。とはいえ、評価値は全体平均よりも低いので、なんらかの対応が必要となろう。

対策としては、ビジネスプランニングに必要な知識・スキルを本科目内で集中的に伝授するレクチャー方式をその一部に取り入れることで、ある程度の評価改善が見込めると思われる。しかし、土曜日に行う実践科目において座学を取り入れることは、カリキュラム全体の趣旨からは本来外れており、それが一部の学生からの要望であったとしても、導入することには多少忸怩たる思いがある。とはいえ、それを導入した場合に評価値がどれだけアップするかはやってみなければわからないので、来年度については必要知識のレクチャーを意識的に多く取り入れることにしたい。

科目区分	科目名	担当教員
実践	ケーススタディ I	近藤 公彦

財務、マーケティング、組織、戦略の視点から企業のケース（事例）を多角的・総合的に検討することを通じて、ケースの現状を正確に分析し問題の所在を明らかにする問題発見能力を習得させることが本授業の主たる目的である。

この目的について、基本科目で習得した財務、マーケティング、組織、および戦略の基本的な知識を活用して、実在の企業を制限のある情報の中で多角的な視点から分析するスキルについて概ね目的は達成できたと考える。しかし、他方で本年はハイブリッド/オンラインと授業提供スタイルが従来と異なるものとなり、これらの提供スタイルに十分に習熟していなかったことから本来この授業が目指していた深度まで議論が進まなかった場面が幾度か見られた。

次年度以降については、オンラインでの授業提供が続くのであれば、オンライン下での議論促進に適合した課題提示ならびにファシリテーションの工夫を行い、全員参加の議論の促進を図っていききたい。また、従前通り、使用ケースの更新、ファシリテーションの工夫についても継続的に検討していききたい。

科目区分	科目名	担当教員
ビジネス ワークシ ョップ	ビジネスワークショップ	李 濟民

ワークショップを3つのコース（プランコース、ケースコース、プロジェクト演習コース）に分け、コース別に集団指導を行いながらも、その成果報告を中間発表と最終発表（リサーチペーパー）に全員参加で行うことで、できるだけ多様な意見を取り入れながら、最終成果物をまとめるように授業を進めている。結果的にすべてのアンケート項目において平均を上回る評価をいただいたので、同じスタイルの講義形式をさらに進化させていきたい。

科目区分	科目名	担当教員
ビジネス ワークシ ョップ	リサーチペーパー	李 濟民

受講生全員が最終レポートを無事提出できたという意味で大きな成果があった。また昨年度よりも学生による評価が高くなったので、フィードバックを早くするなどの改善策が効いていると思われる。ペーパーレス化の一層の推進を図りたい。

授業評価アンケート結果を踏まえた自己評価（令和3年度前期科目）

科目区分	科目名	担当教員
基本	経営戦略Ⅰ（経営戦略）	李 濟民

この科目は、経営者および事業レベルのマネジャ達の基本的役割を理解しながら、経営戦略の策定や遂行に必要な理論および分析ツールを学習することを目的としている。モジュール毎に代表的な戦略ツールの習熟とそのツールを利用して次のモジュールの前半でグループワークを通じてケース分析することによって、より深く理解することができた。M 6の後半とM 7前半においては旗本先生に財務戦略に関する講義とケースディスカッションを担当してもらった。課題としてはケースのリニューアルと課題のフィードバックにおいて一層の工夫が必要と思われる。

科目区分	科目名	担当教員
基本	マーケティングⅠ(マーケティングマネジメント)	近藤 公彦

学生アンケートにおいて、多くの項目において専攻平均を上回り、「理解促進」、「説明」、「資料」等で高い評価を受けている一方、「コメント」、「時間外対応」、「満足度」は専攻平均を下回っている。全体としては授業効果が達成されていると言えるが、専攻平均を下回った項目については、より詳細なコメント、より柔軟な時間外対応等の改善により、満足度の向上を図りたい。

科目区分	科目名	担当教員
基本	経営組織Ⅰ（組織行動マネジメント）	西村 友幸

課題レポートに対するコメントが丁寧というだけでなく、モチベーションを高めてくれる内容だったという学生からの評価は、組織行動マネジメントの教員として冥利に尽きる。授業は毎回、週の初めの月曜日に行われたが、受講者の出席状況や単位取得状況を見るかぎり、回避動機が働くようなものではなかったようで安堵している。教員自身も授業を楽しめた。これは当然のことかもしれないが大事なことで、今後も維持していけるよう心がけたい。もちろん、改善すべき点（例えば「説明」など）は改善していく。

科目区分	科目名	担当教員
基本	アカウンティングⅠ（財務会計）	堺 昌彦

財務分析を行うために必要な基本的な知識に焦点をあて、それらの知識の習得と理解の促進を重視した構成で教材の開発と授業運営を行うことで授業目的について一定の達成を収めることが出来た。他方で、現在のますます複雑化するビジネスにおける会計情報（特に無形資産の扱い）やIFRSの対応については今後後期以降のケーススタディの中での扱いと関連させて授業の中での組み込みを検討していくことが必要である。また、限られたリソースの中で実現可能な有効なフィードバックの提供法については今後も模索していきたい。

科目区分	科目名	担当教員
基本	ビジネス倫理	南 健悟

受講生及び同僚の評価結果からは、講義の方法等については比較的高評価を得ていたと思われ

ることからすれば、引き続き受講生との対話や議論を通じて、講義を行うことが重要であると考えられる。他方で、講義課題やそれに対するフィードバックが非常に弱く、今後の課題と思われる。受講生からは、課題量について少なくても丁度良いという評価がある一方、もう少し増やして欲しいという意見もあり、他の講義課題とのバランスを考えながら、調整する必要があると考えた。

科目区分	科目名	担当教員
基礎	経営組織 III (戦略的人的資源管理)	西村 友幸

戦略的人的資源管理 (SHRM) についての「定見」を持てるようになりたい。SHRM は米国で生まれた概念であるが、この科目の受講者の多くは日本企業にとっての SHRM の意義により強い関心を抱いていると思われる。幸い、日本における経営戦略論史を学ぶ機会を最近得た。日本企業の HRM に関しても過去にさかのぼって資料をサーベイし、その歴史に通暁するようになりたい。そして、戦略論と HRM 論の融合を図りたい。

科目区分	科目名	担当教員
基礎	アカウンティング III (予算管理と業績評価)	乙政 佐吉

授業の目的を達成する上で、レクチャーによる基本的事項の理解、ケース・スタディによる考察、事後課題による内省という授業の進め方自体に問題はなかったと考える。しかしながら、クラス内の対話・討論を活発化させるために、タイム・マネジメントには改善の余地が認められる。講義内容の絞り込みも含めて見直していきたい。

科目区分	科目名	担当教員
基礎	ファイナンス II (企業価値経営)	手島 直樹

グローバルでの MBA の水準で授業をしているため難易度は高くなるが、あくまでもグローバルで見れば普通の授業である。今後も最新のトレンドを踏まえて、授業をしたい。

科目区分	科目名	担当教員
基礎	経済学・分析手法 I (行動意思決定の基礎)	吉地 望

経済学・分析手法 I を受講の皆様から、建設的で温かいコメントを頂きましたこと感謝申し上げます。

新年度は今まで以上にインタラクティブな授業を心がけ、より身近な事例で多くのグループワークができる

モジュール構成にしたいと考えております。また皆様に対する課題等のフィードバックも今まで以上に迅速に

対応する所存です。丁寧で分かりやすい授業を目指しますので一緒に授業を盛り上げていただけると幸いです。

科目区分	科目名	担当教員
基礎	地域経済・経営Ⅰ（プロジェクト・マネジメント）	宇田川 耕一

前回の評価を受けて「コメント」等を改善した結果、評価が向上した。「時間外対応」「事後課題」等にさらなる改善が必要である。

科目区分	科目名	担当教員
基礎	地域経済・経営Ⅲ（北海道経済の課題）	小高 咲

- 学生の皆さんから概ね高い評価を頂き有り難いです。
- ゲストスピーカーの講話も含め、リアルな世界を知り分析し議論することに対するニーズが確認できた。
- 初めて担当したため、自分でももっとこうすればよかったという点が多かったが、授業評価アンケートを通してそれがより明確になった。
- 「北海道経済の課題」を出発点としたが、そもそもどう課題認識すべきか自体を議論するパートがもっとあってもよかったと思う。

科目区分	科目名	担当教員
発展	統合科目Ⅰ（サービスマネジメント）	内田 純一

本授業では、MBAにおける基礎的な知見の上に成り立つ科目として、組織論、戦略論、マーケティング論、会計等から代表的な論点を、本科目サービスマネジメントを結びつけて理解できるようにしている。

扱うサービス業事例の豊富さを心がけており、多様な業界の理解が得られて実務や勉学の役に立ったという受講者からの声を得ている。また、分析スキルについても、実践的であるとの評価を得ていると認識している。

これらが達成できた要因を自己分析すると、地道に毎年ブラッシュアップを心がけているだけで、大きな秘訣があるわけではないが、常に最新のサービス理論や関連する政策、業界の動きなどをウォッチし、速報性が高まるよう授業に早めに取り入れていることなどが遠因となっていると思われる。

学生による評価結果の「満足度」の項目としては全体が4.50に対して本科目は4.50と平均的な満足度評価となった。

また、全体的な評価が満足度の観点では平均値とタイであるほかは、平均値をわずかに上回る項目がほとんどである。しかし、説明、時間外学習、事後課題の三つの項目では平均を下回ったので、次の授業ではこの三点を重点的に改善する必要がある。具体的な対策としては三点考えている。第1に、授業の全体像を早めに受講生に対して提示し、各モジュールごとの説明がどの単元の理解を促すものなのかを理解してもらうようにする。第2の時間外学習については、本授業で出す課題が他の授業よりも少なかったと思われるため、課題の総量を上方修正する。また、第3の事後課題については、事後課題の評価方法のアナウンスが不足していたことが、評価を下げる結果になったと推測されるため、徹底して評価の事前周知とわかりやすい軸での評価を心がけたい。

科目区分	科目名	担当教員
発展	統合科目Ⅱ（企業変革とリーダーシップ）	鈴木 真人

正しいリーダーシップは存在しません。リーダーシップについて学ぶ当方の授業では、テキストをどれだけ理解したか、あるいは、計算や理論をどれだけ正確に運用できるようになったのかなどの“正解”求めるのではなく、立場や場面によって様々なリーダーシップの発揮が求められることを学んで頂きます。特に、成功体験の先に向かって、新たな挑戦をおこなうことで企業変革を進める難しさについて、考察していきたいと考えています。

このような授業の満足度を高めるために、講師と学生はもとより学生間のコミュニケーションが重要です。そのため、グループワークの充実とともに、授業中の質疑回数を増やす、求めに応じて時間外授業を実施する、レポート返却時のコメントをより学生の個別事情に即したものとするなど、の対処をしていきたいと考えています。

科目区分	科目名	担当教員
発展	ビジネス法務Ⅱ（知的財産マネジメント）	小寺・富田・太田

知的財産の概要、知的財産の取得の概略、知的財産の活用方法及び知財紛争の対応について、実務に即して、具体的な事例に基づいて講義を行った。

これにより、法律や知的財産に関してなじみのない受講生において、知財に関して実践的な理解がある程度できたと思われる

科目区分	科目名	担当教員
発展	ベンチャー経営Ⅱ（テクノロジービジネス創造）	瀬戸・武田

講師が北海道電力株式会社より母校である小樽商大に着任して四半世紀が過ぎた。その間、ビジネススクール以前も以後も大学院ゼミで一貫して研究教育してきたテーマが「テクノロジービジネス創造方法論」であった。ここで学んだOBたちは、すでに8名以上が社外または社内ベンチャーのCEO（1社M&A完了、1社IPO予定）および現北大産学連携部門長として活躍中である。また、北大博士課程工学研究科派遣のドクター予定者は、本講義受講中に雑誌『サイエンス』に博士論文予稿を提出してファーストオーサーとして採択され、本学と北大博士課程でMBA&博士号取得とともに欧州化学メーカーに内定し、現地に昨年赴任した。このように、人数は少ないけれども国立大学としてのミッションである高度人材を輩出し、我が国の新産業創出に貢献できたことは、本プログラムの成功と確信する。加えて、本講義録をまとめた『イノベーションの成功と失敗』（同文館出版2015）及び『イノベーション具現化のススメ』（同文館出版2021）を公刊できたことは、望外の幸せであった。こうした機会を与えてくれた前職北海道電力株式会社と母校小樽商科大学に感謝して、本レポートを締めくくりたい。

科目区分	科目名	担当教員
発展	ビジネス英語Ⅱ（初中級ビジネス英語）	小林 敏彦

例年通りの授業の展開となったが、この授業でもっとも強調したのは、「自律的英語学習習慣の獲得」である。そのため、授業中に行うタスクは、すべて授業外に単独で行われる性質のものとした。コロナ禍ではさまざまなオンライン上のデバイスやプラットフォームを利用することでそれ

が可能であることが受講生も認知した様子である。形式上は予定の教授はすべてできたので、それが習得にむずび付いたかどうかの判断は学習の長期的回顧により証明される可能性がある。この授業については、それを判定する時期としては日が浅く、他の知識蓄積型の科目とは性質が異なる。英語の授業はスキル形成であり、それは数か月から数年の年月を要するものでは、1学期の短期間で観察可能な上達のデータ収集は極めて困難である。

科目区分	科目名	担当教員
発展	ビジネス英語 III (中級ビジネス英語)	小林 敏彦

例年通りの授業の展開となったが、この授業でもっとも強調したのは、「自律的英語学習習慣の獲得」である。そのため、授業中に行うタスクは、すべて授業外に単独で行われる性質のものとした。コロナ禍ではさまざまなオンライン上のデバイスやプラットフォームを利用することでそれが可能であることが受講生も認知した様子である。英語のプレゼンテーションの手法については、過去の受講生の協力も得て、スライドの見本など豊富に提示することができたが、それが習得にむずび付いたかどうかの判断は学習の長期的回顧により証明される可能性がある。この授業については、それを判定する時期としては日が浅く、他の知識蓄積型の科目とは性質が異なる。英語の授業はスキル形成であり、それは数か月から数年の年月を要するものでは、1学期の短期間のみで観察可能な上達のデータ収集は極めて困難である。

科目区分	科目名	担当教員
発展	特殊講義 III (Demola program)	簗本・玉井・猪口・金子

本科目は Demons Hokkaido が実施している多数の大学からなるプログラムに参加しており、学部生がほとんどを占める中、OBS からの受講生は議論の展開をマネジメントし、チーム内でより優れたアイデアが生まれやすく育ちやすくすることに腐心するチームビルディングを強く心がけており、チームプロジェクトのマネジャー的な存在として活躍している。教員も単位評価者という立場の一方でチームプロジェクトに関わり続けるという存在でありつづけようとしている。

科目区分	科目名	担当教員
実践	ビジネスプランニング II	齋藤・手島・内田・藤原・奥田・太田・井馬

1. 授業の目的・目標

本授業の目的は「ビジネスプランニング I」で習得したビジネスプランニングの知識・スキルをさらに高めて、より高度なビジネスプラン作成能力を身につけることにある。

「ビジネスプランニング II」は、モジュール 1~2 においてグループ単位 (1 グループ 3 名) で立案する第 1 課題 (既存企業における新規事業計画) と、モジュール 3~4 における各自が個人レベルで実施する第 2 課題 (自由課題) から構成される。本授業では、顧客や市場における要求 (ニーズ) 把握や競合や業界に関わる認識、提供する価値とそれを具現化した商品・サービスの開発、商品・サービスの特性やチャネル特性などを勘案したターゲティングやセグメンテーション、経営資源における強み等々を活かせるようなビジネスを構築する能力の習得・向上を主たる狙いとしている。

授業の目標は二点あり、

①在学中もしくは修了後に、新規事業あるいは新起創業を志す者に必要なビジネスプランニングの技法およびビジネスプランの作成能力を身につけていること。

②経営者や出資者に対して、ビジネスプランを効果的に提示する際に必要な表現力とプレゼンテーション力を身につけていること。

をあげている。

2. 目的・目標の達成状況

高度なビジネスプラン作成能力を身につけるといふ授業目的については、二つの事業計画策定過程を通じて、とりわけ第2課題は個人で取り組む課題として教員のチェックおよび必要な指導を受けることから、全員が一定のレベル以上でその目的を達していると考えている。

到達目標についても、第1のプランニング技法とプラン作成能力を身につけているかどうかを成績評価段階で精査しており、概ね達成できているものと思われる。

第2のプレゼン能力については、4モジュールの全てでプレゼン機会があり、一人が最低でも2回以上の発表を行っており、表現力を身につける機会を用意している。しかし、プレゼン能力そのものは成績算定の基礎点には入れておらず、成績評価段階での精査は行っていない。

3. 目的・目標を達成できなかった事項と原因（あるいは達成できた事項と要因）

目的・目標を達成できた要因は、ひとえにこれまでアントレプレナーシップ専攻が発足以来、積み上げてきた授業運営のノウハウに負うところが大きい。とはいえ、発足以来のメンバーが退職等により少なくなってきており、次世代のこのノウハウをつなぐという面では、マニュアルのような明文化された形式知があるわけではなく、次世代へ継承できるかという点については若干の不安もある。

4. 学生による評価結果

学生による評価結果は、20の項目のうち、およそ半分の項目で専攻平均を上回った。しかし、「資料」にかかわる個所はとくに大きく平均を下回った。

5. 次の授業に向けての改善点

自由記入のコメントのなかで気になった点は、添削する際の教員側の言葉遣いに辛辣すぎるものがある、という意見があったことである。本来は、対面授業により、教員および学生個々のキャラクターを理解しながら、一定の信頼関係のなかで成り立つ指導というものもあると思えるが、リモート授業が大半であった今期はそれが望めなかった。孤独に授業を受講する学生が多い（さらに言えば海外で受講する留学生もいた）なか、より一層の親身のフォローが必要になる場合がある。次の年度に向けて、もしもリモートが続く場合は、このような配慮も加えていきたい。

科目区分 科目名

担当教員

実践

ケーススタディ II

堺・玉井・猪口

本講義においては、専門の異なる教員が適切に共同することで講義を進めていることができた。この結果、履修者は、会計、組織、マーケティング分析、課題の抽出、戦略推奨案の作成の能力を高めることができたと思う。ただし、講義中のケース分析の分析や意思決定方法に対する教員からの説明が不足している点があったため、履修者の学習を一部妨げてしまったことも否定できない。どのような場面でどんな時に教員が説明を行うかについて検討し必要性・不必要性の観点から方策を考えたい。また、zoomに整合した講義方法を引き続き考え、より良い方法を導入することとしたい。

第4章 令和3年度 CGS教育支援部門の活動状況

令和3年度 CGS 教育支援部門の活動内容

4月	<ul style="list-style-type: none"> ・前期授業開始：遠隔授業サポート ・（学部）アクティブラーニングに関する教育効果検証実施要項の策定 ・グローバルプロジェクト（教育分野）採択事業決定 ・（学部）新入生アンケート
5月	<ul style="list-style-type: none"> ・（アントレ）FD研修会
6月	<ul style="list-style-type: none"> ・新任教員研修会 ・（学部）学科単位での授業改善の取り組み
7月	<ul style="list-style-type: none"> ・（学部）アセスメントテスト（GPS-Academic）の実施と検証 ・（学部）授業改善のためのアンケート ・（アントレ）授業参観 ・（アントレ）前期授業評価アンケート
9月	<ul style="list-style-type: none"> ・北海道 FSDS フォーラム（主催：北海道地区 FD・SD 協議会） ・東北・北海道地区大学等高等・共通教育研究会 ・後期授業開始：遠隔授業サポート
10月	<ul style="list-style-type: none"> ・（大学院）大学院FDアンケート
11月	<ul style="list-style-type: none"> ・学生論文賞第一次審査（プレゼンテーション） ・（アントレ）後期授業参観 ・（大学院）FDアンケート
12月	<ul style="list-style-type: none"> ・（アントレ）FD研修会 ・学生論文賞最終審査（2月：結果発表）
1月	<ul style="list-style-type: none"> ・（学部）授業改善のためのアンケート ・（学部）卒業生アンケート調査実施（2010年度、2018年度卒業生対象） ・（学部）卒業年次生向けアンケート ・（アントレ）後期授業評価アンケート ・コンピテンシー評価ツール「GROW」実施
3月	<ul style="list-style-type: none"> ・アクティブラーニングシンポジウム2021開催 ・三大学合同FSDSワークショップ（リベラルアーツ） ・学生論文賞表彰式 ・FD活動報告書作成

令和3年度
CGS教育支援部門スタッフ一覧

教育支援部門運営会議		
教育支援部門長		佐野 博之
教育支援副部門長		大津 晶
教育支援副部門長		田島 貴裕
	CGS副センター長 (教育担当副学長)	鈴木 将史
	学部教育開発専門部会長	中浜 隆
	大学院教育開発専門部会長	松家 仁
	専門職大学院教育開発専門部会長	猪口 純路
学部教育開発専門部会		
部会長		中浜 隆
	教育支援部門長	佐野 博之
	CGS副センター長 (教育担当副学長)	鈴木 将史
	教育支援副部門長	大津 晶
	教育支援副部門長	田島 貴裕
	学部教務委員会委員長	安宅 仁人
		中村 健一
		高橋 周史
		佐山 公一
		西永 亮
		石井 登
大学院教育開発専門部会		
部会長		松家 仁
	大学院現代商学専攻長	片桐 由喜
	大学院現代商学専攻教務委員会委員長	廣瀬 健一
		金 鎔基
		岩本 尚禧
		ジョーダン チャールズ
		山田 久就
		西口 純代
専門職大学院教育開発専門部会		
部会長		猪口 純路
	大学院アントレプレナーシップ専攻長	齋藤 一朗
		内田 純一
		小林 敏彦
		手島 直樹
キャリア教育開発専門部会		
部会長	教育支援副部門長	大津 晶
	教育支援部門長	佐野 博之
	教育支援副部門長	田島 貴裕
	CGS副センター長 (教育担当副学長)	鈴木 将史
	学部教務委員会委員長	安宅 仁人
	教務課長	高玉 博史
	学生支援課長	勘原 和彦

編集

令和3年度小樽商科大学グローバル戦略推進センター教育支援部門運営会議

部門長	佐野 博之	(経済学科教授)
副部門長	大津 晶	(社会情報学科教授)
副部門長	田島 貴裕	(教育支援部門教授)
	鈴木 将史	(理事, 教育担当副学長)
	松家 仁	(経済学科教授)
	中浜 隆	(商学科教授)
	猪口 純路	(アントレプレナーシップ専攻教授)

	高玉 博史	(教務課長)
	河崎 智之	(教務課特定専門職)
	稲童丸 翔	(教務課教務企画係)
	藤井 哲之進	(教育支援部門主任技術職員)

協力	西出 崇	(教学 IR 室准教授)
----	------	--------------

ヘルメスの翼に—小樽商科大学 FD 活動報告書— 第14集

発行日 令和4年5月1日

発行所 国立大学法人北海道国立大学機構 小樽商科大学

グローバル戦略推進センター教育支援部門

〒047-8501 小樽市緑3丁目5番21号

TEL : 0134-27-5240 / FAX : 0134-27-5238